シモン＝ボッカネグラ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シモン＝ボッカネグラ

【Ｎコード】
Ｎ３２６０Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
貴族と平民の対立が続いていた十三世紀ジェノヴァ。平民派として元首に推挙されたシモン＝ボッカネグラは長い時を経て生き別れの娘と再会するがそれと共に貴族派の領袖であり死んだ妻の父でもあったヤコブ＝フィスコとの因縁も再燃し。ヴェルディのオペラの作品を小説化したものです。登場人物は実在人物が多いです。こちらにも掲載してもらっています。
ｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐａｉｎｗｅｓｔ．ｎｅｔ／

プロローグその一

プロローグ

人にはどうも出来ないものが幾つかある。その中の一つとして運命がある。

これは時として非常に残酷なものである。人を玩び苛み、そして死なせる。まるで人はその運命の玩具であるようだ。

これをどうにか出来るのならば誰もがそうしたいであろう。だがどうにもならない。人が出来るものと出来ないものがあるのだから。それはある人達にとっては何とかしたいが揺るがない事実として常に立ちはだかる。

この運命に支配されその数奇な一生を送った者も多い。その中の一人としてこの作品の主人公がいる。

時は十四世紀中頃、まだ中世である。この時の欧州はいまだ政治も文化もローマ＝カトリックの絶対名影響下に置かれていた。一度分裂を経験しているとしてもその力は尚隠然たるものがあった。それからの精神的な解放はルネサンスまで待たねばならなかった。否、それでもまだ教会のくびきは人々を捉えていたのだ。

西では百年戦争やレコンキスタが行なわれ東ではオスマン＝トルコがビザンツ帝国を追い詰めようとしていた。その時代イタリア半島も又分裂していた。

当時のイタリアは多くの領邦国家や都市国家に分裂していた。教皇領もあれば貴族達の領土もあった。

その中ジェノヴァは商業都市として栄えていた。港町であるこの街は地中海の海運を担うことにより莫大な富を蓄えていたのだ。その富は欧州全土からの羨望の的であった。

この街の成立は古い。ローマ帝国の頃には既に自治都市として成立していた。

十二世紀になると司教伯の支配権を獲得して政治と宗教を混在さ

せた自治権を獲得した。
この街が莫大な富を得たのは十字軍の遠征からであった。これに協力する事により富を得たのである。その繁栄は東のヴェネツィアと競う程であった。
繁栄と共に脅威があるのも又世の常であろうか。この時ジェノヴァは多くの敵を抱えていた。
まずは宿敵ヴェネツィア。そしてピサ。海にはイスラム教徒達がいた。
こうした脅威に対してジェノヴァもただ座しているわけではなかった。降り掛かる火の粉は払う、それが国際社会である。それは昔も今も変わらない。
当時のジェノヴァはこうした中にあった。そして今この街に一つの大きな動きが起ころうとしていた。夜のジェノヴァの街である。
サン＝ロレンツォ教会。この教会はこの街の生き証人でもある。右手にはこの街の有力な貴族の館がある。階級社会である欧州であるがそれはこのジェノヴァでも同じであった。当然貴族と平民の対立もある。
左手には平民達の家が連なっている。貴族の邸宅に比べるとやはりみすぼらしい。それが階級というものを教えてくれる。
この街においても貴族と平民の対立は根強い。それが為に今この街は分裂状態にあるのだ。
教会の前を二人の男が歩いている。何やら色々と話し込んでいる。
「おいピエトロ、それは本当の話か！？」
黒い髪の中年の男が赤い髪の若い男に言った。
「パオロ、声が大きいぞ」
ピエトロと呼ばれたその赤髪の男は黒髪の男に対して言った。
「本当だ。総督に選ばれるのはこのままじゃロレンツィーノで決まりそうだ」
「よりによって最初の総督があんな奴になるのか。他にはいないのかよ」

パオロは不満を露にして言った。
「いるぜ、一人」
ピエトロはニヤリ、と笑って言った。
「誰だ？」
パオロはそれに対して問うた。
「御前さんもよく知っていると思うがな。シモンの旦那だ」
「シモンの旦那！？シモン＝ボッカネグラか」
パオロはその名を聞いて思わず喜びの声をあげた。
「ああ、あの人ならその資格は充分あるだろう」
「おお、地中海からサラセンの奴等を追っ払いヴェネツィアの野郎共をのしてくれたあの人なら問題ないな。嫌、他に相応しい人もいないだろう」
「そう思うだろう。あの人はしかも平民出身だ。総督に押し上げたら俺達にも分け前がたんと来るぜ」
ピエトロはそう言ってニンマリと笑った。
「黄金も権力も名誉も思いのままか。今まであの連中が独占していた」
パオロはそう言って右手の貴族の邸宅を見た。
「ああ、その中でも散々威張り散らしてくれたフィエスコの野郎、あいつだけは只じゃおかねえ」
ピエトロはその屋敷を憎悪の目で見た。
「当然だ。あいつは許さねえ。この屋敷と一緒に焼き尽くしてやる」
「そうしようぜ。俺はその事前の準備に取り掛かるとしよう」
「おお、頼むぜ。そして貴族の奴等を皆殺しにしてやるんだ」
「そうだ、あの高慢な鼻を削ぎ落とし縛り首にして腐った果物みたいにずっと吊るしてやる」
ピエトロはそう言うと左手の平民の家々の中に消えた。後にはパオロが残った。
「見てろよ、お偉いお貴族様よお」
パオロは再び屋敷を見て言った。

「今まであんた等にへいこらしていたがこれからは違うぜ。今度は俺達が手前等をこき使う番だ」
そう言って笑った。憎しみに燃えた見ていてあまり気分のよくない笑みである。
その時左手から一人の男がやって来た。
質素な船乗りの服を着た黒い髪と瞳の男である。顔は日に焼けた精悍なものでありやや長身のその身体はよく引き締まっている。彼こそシモン＝ボッカネグラその人である。
ジェノヴァの有力な市民の家に生まれた。彼の家は平民ながら代々この街の政治に携わっており首長も出している。
彼自身は海賊をやっていた事もあるがこれは海賊と言うよりはジェノヴァの為に戦う海軍のようなものであった。当時は海賊と海軍の区別は比較的曖昧であった。当然海賊が国家に召し抱えられて海軍になる場合もあったしその逆もあった。彼もそうした船乗りであったのだ。
彼はイスラムやヴェネツィアとの戦いで武勲を挙げた。そして今や平民達にとては希望の星だったのだ。
「おいパオロ、俺に何の用だ？」
彼はパオロの姿を認めると彼に尋ねた。
「おや、ピエトロから事情はお聞きした筈ですが」
彼はそれに対して悪戯っぽく笑って言った。
「俺が総督にか？馬鹿な事を言うな」
シモンは顔を顰めて言った。
「おや、ご不満ですか？この街の長になるというのに」
「俺はそんなものには元々あまり興味は無いしな。それとも御前等は自分達の為に俺を担ぎ出すつもりか？」
「それが嫌だとでも」
パオロはそれを肯定した。
「当然だ。御前等がこの街の貴族達に対してどう思っているのかは知っている。だがそれは俺には何の関係も無いだろう。そんなに何

かしたいのなら御前達だけでやれ」
シモンは不快を露にして言った。

プロローグその二

「マリアが手に入らなくとも？」
パオロはシモンを見て言った。その名を聞いたシモンの顔色が一変した。
「それは・・・・・・」
その名を聞いてシモンの様子が一変した。
「どうなんですか？」
彼はさらに突っ込んできた。シモンはそれに対し狼狽したがすぐに落ち着きを取り戻した。そして彼に対し言った。
「もう終わった事だ今更言っても。しかし御前はマリアについて何か知っているのか？」
「ええ」
パオロはそれに対して答えた。
「あそこにいますよ」
そう言って右手の屋敷を指差した。
「フィエスコの屋敷か・・・・・。あの男の屋敷か」
彼はその屋敷を見上げて忌々しげに呟いた。
「はい。あの男は娘を閉じ込めているんですよ」
パオロはシモンを煽る様に言った。
「俺と交際し子供までもうけたからか。・・・・・・相変わらず血も涙も無い奴だ」
シモンは知らず知らずのうちにその煽りに乗ってしまった。
「そう思われるでしょう。しかし総督になればすぐにでも助け出せますよ」
「すぐにでも・・・・・・」
シモンは屋敷を見た。夜の街に冷たくそびえ立っている。それはまるで牢獄のようであった。
「どうです、それは最早貴方の一存なのです。総督になるか、なら

ないかの」
「・・・・・・・・・」
シモンはその言葉に沈黙した。そして逡巡した。
「・・・・・・全ては俺の一存なのだな」
「そうです」
シモンの問いに対して答えた。
「さあ、どうします？」
「それは・・・・・・」
彼が言おうとしたその時だった。左手から多くの人が来る気配がした。
「誰か来たみたいですね。今はまだ見つかるとまずいです。隠れましょう」
「ああ」
シモンは教会の向かい側に去って行った。パオロはフィエスコの屋敷の陰に隠れた。
「ん、あいつか」
見ればピエトロであった。職人や水兵達を連れ何か言っている。
「いいか、明け方ここに来てくれよ」
彼は連れて来た連中に頼む様に言っている。
「成程、早速やっているな。よしよし」
パオロはそれを見ながらほくそ笑んだ。
「で、俺達に頼みって何だ？」
職人のうちの一人がピエトロに尋ねた。
「ああ、悪いが皆明け方にここに来てくれないか」
彼は皆に頼むように言った。
「どうしてだい？」
水兵の一人が尋ねた。
「うん、今度の選挙の事なんだが」
ピエトロは皆に顔を向けて言う。
「ああ。確か今はロレンツィーノが優勢だったな」

「おお、金貸しのな。同じ平民だし」
一人が言った。
「当然だろう？貴族の奴等を総督にするわけにはいかないからな」
皆が言った。ピエトロはそれに対し顔を顰めさせて言った。
「・・・・・・悪い事は言わない、あいつは止めておいたほうがいい」
「どうしてだい？」
皆はそんな彼に尋ねた。
「あいつは貴族と裏で繋がっている。総督になったらあいつ等と結託するぞ」
「本当か！？」
「ああ、それもこのフィエスコの奴とだ」
彼はそう言って右手の屋敷を顎で指し示した。
「よりによってフィエスコの奴とか・・・・・・」
「何て野郎だ」
フィエスコはこのジェノヴァでも有数の権門である。それが為に平民達からは目の敵にされているのだ。
「じゃああいつは止めだ、冗談じゃない。では替わりに誰を立てる」
「一人適任の人物がいるだろう」
ピエトロはニヤリと笑って言った。
「？誰だ？」
一同はそんな彼に尋ねた。
「英雄だ」
「英雄？」
「そうだ、英雄だ」
ピエトロは一同に意味ありげに言った。
「英雄はいいが俺達平民の間にそんな凄いのいるかなあ」
「ああ、それもフィエスコとかを抑えられるような奴だろ。ちょっとやそっとじゃなあ」
一同は首を傾げて話し合った。

「おいおい、いるだろうが一人凄いのが」
ピエトロはそんな一同を笑いながら言った。
「だからそれは誰なんだよ」
「まさかあんたってんじゃないだろうな」
「えっ、俺！？」
ピエトロは自分を指し示されて思わず噴き出した。
「おいおい、いくら俺でも自分が総督に相応しいとは思っていないぜ」
「じゃあ早く言えよ」
「そうだそうだ、勿体ぶらず早く教えろよ」
皆彼を取り囲んで迫る。彼はそれを見てゆっくりと口を開いた。
「シモン＝ボッカネグラの旦那だ」
「おっ、あの船長さんか？」
職人の一人がその名を聞いて言った。
「確かにいい船長さんだけどな。強いし優しいし」
水兵の一人が言った。彼は部下の間では評判がいいのだ。
「そうだ、あの人なら適任だろう？」
「確かにな。あの人なら貴族を抑えられる」
一同ピエトロの言葉に頷いた。
「これで俺達の天下だ」
皆ピエトロのその言葉に頷いた。彼等は貴族を激しく憎んでいた。
そして自分達が街の権益を独占しようと考えていたのだ。

プロローグその三

「そしてフィエスコの奴はどうなるんだ？」
一同の中の一人がポツリと言った。
「これさ」
頃合い良しと見たパオロが出て来た。そして左手で首を切る仕草をする。
「皆来てくれ」
そう言って手招きする。皆それに従い彼を取り囲んだ。
「あの屋敷を見てくれ」
そう言ってフィエスコの屋敷を指差した。
「フィエスコの奴はあそこに一人の美女を閉じ込めている」
「ああ、それは聞いた事がある。何でも自分の慰み者にしているとか」
一人が言った。
「まあ話は最後まで聞いてくれ。そう、そして彼女は暗い牢獄の中でいつも泣いているのだ」
「何て奴だ、それでも人間か」
「この手で八つ裂きにしてやろうか」
「いや、火炙りにしろ。悪魔は火で焼き尽くしてしまえ」
パオロの言葉に皆激昂した。
「まるで悪魔の館だな。哀れな美女が悪魔の奴隷になっているのだ」
「そう、そしてあの門は傲慢な貴族共にだけ開かれるのだ。そしてその宴を共有するのだ。気の毒な美女が奴等に貪り食われているのだ。・・・・・・静かにしてくれ、その哀れな人の心が彷徨う気配がするだろう」
「ああ、許せん、貴族の奴等は皆殺しだ！」
一同は怒り来るって叫んだ。
「諸君、見ろ」

その時屋敷の中から光が見えた。赤く弱い光である。
「悪魔共の火だ」
「恐ろしい！」
「あんな連中をこれ以上のさばらせていいのか？今度は俺達の恋人や娘がああやって奴等に貪られるんだぞ」
パオロはここで彼等を煽る様に言った。
「そんな事許してたまるか！」
「おお、逆に俺達が奴等を一人残らず地獄へ叩き落としてやる！」
「そうだ、正義の鉄槌であの腐った頭を叩き潰してやる！」
彼等は口々に叫ぶ。パオロとピエトロはそれを見てニヤリ、と笑った。
（上手くいったな）
（ああ、これで決まりだ）
二人は囁き合って笑った。
「では皆明け方ここに来てくれるな」
パオロは一同に顔を向けて言った。
「当然だ！」
彼等は一斉に叫んだ。
「よし。そして誰を選ぶのかもわかっているな」
「当然だ、シモン＝ボッカネグラの旦那だ！」
（これでよし）
二人は心の中で笑った。
「では明け方に」
「おお！」
パオロとピエトロは一同を連れてその場を後にした。そして酒場に連れ立って行った。
静まり返った屋敷の門から一人の男が出て来た。
歳はシモンより一回り以上上であろうか。黒い髪と瞳の気品のある堂々とした顔立ちの長身の男である。その長身は豪奢な服に覆われている。この屋敷の主ヤコブ＝フィエスコである。

このジェノヴァでも有数の門閥貴族の家の当主である。富裕を誇り街への影響力も絶大である。
また権謀術数の渦巻くこの街でも有数の政治家である。その政治力により彼は街で最大の実力者となっていた。
だがそれが平民達の怒りを買った。彼等との戦いにより彼もまた力を失い今は失脚している。
「愚かな者達だ、そうして内部で争って何になるというのだ」
彼は下に下りて言った。そしてふう、と溜息をついた。
「だがもうそんな事はどうでもいい。最早この屋敷とも永遠の別れだしな」
そう言って屋敷を見た。暗闇の中に浮かび上がるその屋敷は何も言わない。
「マリア・・・・・・」
ふと女の名を呼んだ。
「聖母様と同じ名を与えたというのに。何故幸薄くわしより先に死んだのだ」
頬を涙が伝う。
「わしは御前をどうする事も出来なかった。沈む御前をどうする事も出来なかった」
そう言って顔を俯けた。
「あの男との結婚を許すべきだったのか、いや、それだけはならん」
彼はそう言って頭を振った。
「だがあの娘を殺したのはわしだ。・・・・・・わしは何と愚かな父なのだ」
屋敷から多くの人々が出て来た。どうやらフィエスコ家に仕える者達のようだ。
「旦那様、お元気で」
彼等を代表して一人の年老いた男が言った。
「うむ、そなた達も元気でな。今までご苦労だった」
「はい・・・・・・」

彼等は礼をしてその場を去って行く。フィエスコはそんな彼等を無言で見送っている。
「娘もいない、家もない。最早わしは只のさすらい人か」
彼はその場を去ろうとする。だがその時誰かが屋敷の前に来た。
「あの男は・・・・・・」
それを見たフィエスコの顔が怒りに満ちていく。シモンが来たのだ。
「至るところで俺の名を呼んでいる。どうやら俺が総督になりそうだな」
彼はそう呟きながら教会のところにやって来たのだ。
「明け方に皆ここに来るというが。そうすればようやく俺は彼女を迎えられるのだな」
そう言って屋敷の方を見た。
「もう少し待っていてくれよ。そうすれば俺達は一緒になれる」
「そう上手くいくかな」
フィエスコが彼の前に出て来た。
「あんたか」
シモンは彼を見て言った。無意識に眉を顰める。
「よくもまあそんな事が言えるな。あの娘が御前の妻になるだと？」
フィエスコも不快さを露にして言った。
「丁度貴様に天罰が下るように願っていたところだったというのに。今そうして貴様の顔を見るとはな」
「あんたはそうやっていつも悪口ばかり言うな。いつも俺が頼んでいるのに」
「頼み？何だそれは」
フィエスコはとぼける様に言った。

プロローグその四

「それがあんたの孫の父親に言う言葉か！？あんたに認めてもらう為に身を盾にして戦ってきたというのに」
「そんなものは御前が勝手にした事だ。わしの知った事ではない」
彼は冷たく言い放った。
「確かに御前はこのジェノヴァの為に戦った。だがそれとこれとは何の関係も無い」
「だから和解しようと言ってるじゃないか」
「和解？どうして貴様などと和解しなくてはならんのだ？」
彼は顔に侮蔑の色を込めて言った。
「わしはフィエスコ家を侮辱した者は決して許さん、それが我が家の掟なのだからな」
「ではどうすればいいんだ！」
「そんな事は自分で考えろ」
「くっ・・・・・・」
シモンはその言葉に声を詰まらせた。
そして暫く考えた。フィエスコの方を向くと言った。
「俺の命で気が済むのか？」
フィエスコは答えない。
「では一思いにやれ。彼女と結ばれないならどうせ同じだ」
「御前の命！？」
彼は傲然と見下した声で言った。
「そうだ、そんなに憎むというのなら一思いに殺せ。そのほうがお互い清々する」
「フン、何故そんな事をせねばならんのだ」
フィエスコは冷然と言った。
「わしは別に貴様を殺そうとは思わん、確かに貴様は憎いが我が家を侮辱した事は忘れてやってもよいのだ」

彼はシモンを見て言った。
「一つ条件があるがな」
「条件！？」
シモンはその言葉に反応した。
「そうだ。貴様がわしの可愛い娘に手をつけて生まれたあの娘をわしに譲るというのならな。わしとて孫は可愛い。あの娘には何の罪も無い。まだ顔も見ていないがわしはその娘をきっと幸せにしてやる。どうだ、悪い条件ではないだろう」
「・・・・・・それは出来ない」
シモンはその言葉に声を沈ませて言った。
「何故だ？」
「運命を司る神があの娘を連れて行った」
「それはどういう事だ？」
フィエスコはその言葉に眉を顰めた。
「俺はあの娘をこのジェノヴァから離れたところで育てていた。俺は敵が多いからな」
平民達に人気があり軍人として有名なシモンは度々刺客に命を狙われていたのだ。
「俺はその家で一人の年老いた女に世話をさせていたのだ。ある日俺はその家に帰った」
「ほほう、それでどうしたのだ？」
「家には誰もいなかった。中では女が殺されていて娘の姿は何処にもなかった」
「御前の敵の誰かがやったのだろうな。誰かまではわからぬが」
「ああ。俺はあちこちを探し回った。・・・・・・だが見つからないのだ。今だにな」
シモンは話し終える頃には完全に沈んでいた。
「それは不憫で残念な話だがそれでは仕方無いな」
フィエスコは冷たく言った。
「ならばこの話は無かったことになる。わしは御前と和解はせん」

彼はそう言うとシモンに背を向けた。
「待ってくれ、娘は必ず見つけ出す」
シモンはそんな彼を呼び止める様に言った。
「どうやってだ？」
フィエスコは後ろを振り返らず言った。
「それは・・・・・・」
シモンは言葉が無かった。方法が思いつかなかった。
「無いのだろう、それでは話にもならん」
フィエスコはそう言うと去って行こうとする。
「おい、待ってくれ！」
シモンは呼び止めようとする。だが彼はそれには耳を貸さず姿を消した。後にはシモンだけが残った。
「・・・・・・何という奴だ」
シモンはそんな彼の後ろ姿を見て言った。
「あんな美しく清らかな娘がどうしてあんな男から生まれたのだ。信じられん」
ふと屋敷を見る。扉が開いていた。
「中にいるんだったな。入れてもらうか」
扉の前に行く。そして中を窺う。
「誰もいないな。失礼だが入ってみるか」
彼はそう言うと屋敷に入って行った。そこへフィエスコが戻って来た。
「ほう、奴は屋敷の中へ入ったか」
シモンの姿が無く屋敷に光が照っているのを見て言った。
「精々探し回れ。そして冷たくなった娘を見るんだな」
彼はシモンを呪うように言った。その声には憎悪の他に悲しみも混じっていた。
シモンは屋敷の中を家の中で見つけた聖母像の燭台を手に探し回っていた。
「マリア、一体何処にいるんだ」

屋敷の中は誰もいない。そして彼は地下室へ入って行った。
「さて、そろそろかの」
フィエスコは暗い笑みを浮かべて言った。
「貴様もわしと同じ苦しみを味わうがいい」
そう言った時だった。シモンが屋敷から出て来た。
「そんな・・・・・・・・・」
彼は完全に絶望していた。屋敷の門をくぐり外に出るとガックリと膝を着いた。
「何故だ、何故彼女は死んだのだ・・・・・・」
フィエスコはそれを見て相変わらず暗い顔で笑っている。そこへ遠くからシモンを呼ぶ声が聞こえてきた。
「ボッカネグラ！」
大勢の群集の声だ。シモンはすぐにそれに気付いた。
「何だ？」
見れば職人や水兵達である。松明を手に持っている。他にも多くの者がいる。老若男女様々だ。
「あれは・・・・・・」
その先頭にはパオロとピエトロがいる。どうやら彼等が明け方に来てくれるよう集めた者達らしい。
「旦那、そんなところにいたのか」
パオロが彼に声をかけた。
「これを見てくれ、皆貴方に総督になって欲しいんだ」
ピエトロも言った。
「皆の願いだ、総督になって街と俺達を導いてくれ」
皆その声に頷いた。松明の火がゆらゆらと揺れた。
「総督か・・・・・・」
シモンはそれを半ば放心した状態で聞いていた。
「俺にはそんなもの・・・・・・」
「皆貴方を必要としているんだ」
「そうだ、それを断るのはどうかと思うぞ」

二人はそんなシモンに無理強いするように言った。
「そうか・・・・・・」
シモンは皆の顔を見た。皆彼を期待する眼差しで見ている。
彼にはもう断れなかった。絶望した気持ちをそれで紛らわせようと思った。
「わかった、引き受けよう」
その言葉を聞き皆歓声をあげた。
「よし、これで俺達の総督の誕生だ！」
「ああ、貴族の奴等を黙らせて俺達のジェノヴァを築くんだ！」
皆口々に叫ぶ。
「結局は貴族が憎いだけなのか・・・・・・」
シモンはそんな彼等を見て呟いた。だがそれは彼等の耳に入っていない。
「あいつが総督か、何ということだ」
フィエスコはそれを見て苦々しげに呟いた。だがすぐに姿を消した。
「いずれ時が来る。その時こそ恨みを晴らしてやる」
皆シモンを取り囲んで松明を掲げて喜びの声をあげる。しかしシモンはそれを沈んだ気持ちで聞いていた。

第一幕その一

第一幕　グリマルディ家庭園

シモンがジェノヴァの総督になり二十五年が過ぎた。一度は貴族達の策謀により職を退いたが再び総督になり今もジェノヴァを統治している。その統治は平民と貴族の対立を宥めながら街の繁栄をもたらしており市民達からの評判は高かった。

だがそれでも彼に反発する者はいた。平民出身である彼を嫌う貴族達であった。

彼等は自分達が街の繁栄をもたらしてきたと自負しており事あるごとにシモンや彼を支持する平民達に反発していた。シモンはそんな彼等を宥める方針だったが中には彼の命を狙う者もいた。彼はそれに対しては容赦なく処断を下していた。

そうして平民と貴族の対立は続いていた。貴族達はシモンを除こうとし平民達は貴族達を追い出すか皆殺しにしようと考えていた。平民達にとって貴族とは憎むべき敵でしかなく事実有力貴族への讒言や暗殺が後を絶たなかった。

これの中心にいたのがパオロであった。シモンの腹心となった彼は街の有力な貴族を根絶やしにしようと考えていたのだ。

だがシモンはそこまで考えてはいなかった。貴族も必要でありまた同じジェノヴァの者であると考える彼はその横暴を抑えながらも権利は保護していたのだ。

そういった状況でこの二十五年は進んでいた。対立は結局一向に収まらなかった。むしろ激化する一方であった。

ここはそのジェノヴァの有力貴族グリマルディ家の邸宅である。かってはシモンと対立していたが今は和解して彼に最も協力的な貴族の門閥の一つとなっている。

その邸宅はジェノヴァの郊外にあった。海を臨むその屋敷は美しくまるで海の神の宮殿のようであった。

その庭園もまた実に美しい。古代ローマの趣きがある建物に緑の草や色とりどりの花が囲まれている。
夜が去り朝が来ようとしている。海に今茜色の太陽が昇ろうとしている。
それを見る一人の女性がいる。薄い青のドレスに身を包んだ小柄な女性だ。
髪は金である。それが太陽の光に照らされ輝いている。
瞳は青い。まるで海の様に深い青をたたえている。
その整った顔立ちは今海から上がって来たニンフのようだ。肌は白く透き通る様である。
彼女の名はアメーリア＝グリマルディ。この家の娘である。美しく心優しい女性として知られている。
彼女は今昇って来ようとしている太陽を見ている。そしてうっとりとした眼差しで言った。
「今消えようとする星や月が瞬いてるのね。まるで名残りを惜しむように」
明るくなろうとしている空にはまだ星達があり白い月が世界を照らしていた。
「この屋敷を夜の間照らしてくれた月や星達よさようなら。またお会いしましょう。そしてまたこの美しい屋敷を照らして下さい」
星の光は空に消えようとしている。月もその輝きを失い消え去ろうとしている。
「花には露が落ちている。そしてその露を今度は太陽が照らしてくれるのね」
海の方を見る。暗い闇の中にその波音だけを聞かせる海はその姿を太陽に照らし出されようとしている。
「空が白んできてそして朝がやって来る。それと共に私の愛しいあの人も目覚めるのね」
その時遠くから声がした。
「アメーリア！」

女の名を呼んでいる。高く澄んだ男の声だ。
「あの人ね」
アメーリアはその声を聞いて微笑んだ。
「何処にいるんだい？」
どうやら彼女を探しているらしい。彼女はそれを聞いて微笑んで言った。
「こっちよ。庭園にいるわ」
それを聞いた男の気配がこちらにやって来る。そして彼が姿を現わした。
黒い髪に黒い瞳の若々しい青年である。歳はアメーリアより少し下のようだ。まだ少年の面影が残るその顔立ちはそこに気品や熱さも漂わせていた。
赤と黄色の上着に黒いズボンを身に着けている。細身の引き締まった身体である。背は普通位か。
彼の名をガブリエレ＝アドルノという。ジェノヴァの有力貴族の一人である。
「またここにいたのかい？」
ガブリエレは彼女の姿を認めて言った。
「ええ。ここの景色がとても綺麗なので」
彼女は微笑んで答えた。
「うん、確かにここの景色は素晴らしいね。何度見ても飽きないよ」
彼はそれに同意して言った。
「気に入ってもらえて嬉しいわ。出来る事なら貴方とずっと見ていたいわ。ずっとね」
彼女は彼の目を見て言った。
「ずっと、って。何か思わせぶりだね」
ガブリエレはそんな彼女に対して言葉を返した。
「それは・・・・・・」
アメーリアはそれに対し言葉を濁らせた。
「どうしたんだい？」

彼は尋ねた。
「私に何か隠してない？」
アメーリアは彼に逆に問うてきた。
「えっ、それは・・・・・・」
彼はそれを聞いて狼狽した。それが答えだった。
「総督に対してクーデターを考えている・・・・・・。昨日貴方が話しているのを聞いてしまったの」
「そうか、聞いていたのか」
ガブリエレはそれを聞いて表情を暗くした。
「貴方のお父上の事は知っているわ。その気持ちはよくわかるわ。けれど・・・・・・」
アメーリアも話しているうちに表情を暗くさせていく。
「私は貴方が断頭台で無残に死ぬのを見たくはないの。お願い、そんな事は止めて」
「けれど・・・・・・」
ガブリエレは言葉を詰まらせた。
「出来ない、僕は父の仇を討たなくてはいけないんだ」
彼は頭を振って言った。

第一幕その二

「それは無理よ、総督はいつも貴方達を監視しているから」
「いや、それでもやらなくちゃいけないんだ。それが僕の務めなんだ」
彼は恋人の訴えを必死に振り払おうとする。
「今日もそれで集まりがあるんだ。奴を倒す為のね」
「止めて！」
「出来ない！」
彼は頑迷にそれを振り払った。
そしてその場を立ち去ろうとする。だがその時誰かが屋敷に来たようだ。何やら複数の足音が聞こえて来る。
「ムッ！？」
ガブリエレはそれを確認して身構えた。腰の剣に手をかける。
「待って、貴方の命を狙ってるんじゃないわ」
アメーリアは彼を落ち着かせる様に言った。
「貴方の敵には変わりないけれど」
「敵！？もしかして」
「ええ、総督よ。今日は狩猟に行かれる際にこちらに来られる予定だったの。少しお早いけれど」
「あいつが！？ならば！」
ガブリエレはそれを聞き剣を手に門のところへ行こうとする。
「駄目、人が大勢いるのよ！」
アメーリアはそんな彼を必死に止めた。彼は次第に落ち着き剣から手を離した。アメーリアはそれを見てホッと胸を撫で下ろした。
そこに使用人が入って来た。
「こちらに総督の使者が来られます」
「誰？」
アメーリアは尋ねた。見れば顔が強張っている。

「ピエトロ様です」
アメーリアはそれを聞いて胸を撫で下ろした。
「何かあるのか？」
ガブリエレはそれを見て不思議に思った。そこへピエトロがやって来た。
「これはどうも」
ピエトロもアメーリア達も互いに礼をした。
「間も無く総督が来られます」
ピエトロは簡潔に言った。
「わかりました。喜んでお待ちしております」
アメーリアは慎ましやかに答えた。ピエトロはそれを伝えるとすぐにその場を立ち去った。
彼が立ち去ったのを見てガブリエレはアメーリアに尋ねた。
「さっき顔が強張っていたけれどどうしたんだい？」
「ええ、実は総督が私に結婚を勧めていて」
アメーリアは嫌そうな顔をした。
「誰だい？」
「パオロなの。あの男の後妻にって」
「パオロ！？よりによってあの男か」
ガブリエレも彼の名を聞いて不快感を露にした。パオロは総督の腹心として貴族達を次々と陥れている為彼等から蛇蝎の如く忌み嫌われているのだ。これには総督であるシモンや平民達もいささか辟易している程である。
「総督の腹心だから縁組になるわね。けれど私は嫌、あんな男と一緒になるのは」
そう言ってガブリエレの胸に飛び込んだ。
「アメーリア・・・・・・」
彼はそんな彼女を抱き締めた。その時彼女を呼ぶ声がした。先程の使用人の声だった。
「あら、何かしら」

「行っておいで、何かあったらすぐに行くから」
「ええ」
アメーリアはその場を離れた。庭園にいるのはガブリエレ一人になった。
「朝日が昇ったか」
彼は海から昇って来る太陽を見て言った。
「とりあえずお腹が空いたな。何か食べるとするか」
その場を去ろうとする。そこで一人の老人と出会った。この家の使用人の一人でアメーリアの養育係を務めている。心優しく堅実な老人でアメーリアも彼を深く信頼している。
白い髪と髭の長身の老人である。服は黒っぽいゆったりとした長いものを着ている。
「あ、これはどうも」
老人はガブリエレを認めると一礼した。二人は顔見知りである。
「いえいえ、こちらこそ」
ガブリエレも挨拶を返す。身分は彼の方が上だがこの老人には敬意を払っているのだ。
「何かお悩みのようですね」
老人は彼の顔を見て言った。
「ええ、まあ」
彼はそれに対して口ごもった。まさかクーデターの件をこの老人にも悟られたのかと思った。
「お嬢様の事で、ですね」
ガブリエレはその言葉を聞いてホッとした。
「はい、そうなんです」
彼はそれに対し言った。これもまた事実であった。
「実は彼女と結婚したいのですが」
「我が家の主人には了承は？」
「既に得ています。快諾してくれました」
「ならば何の問題もないですが」

「それが、総督が・・・・・・」
「総督が！？」
それを聞いた老人の目が一瞬憎悪で燃え上がった。だがそれはほんの一瞬だったのでガブリエレは気が付かなかった。
「実は彼女をパオロの後妻にしようと考えておられるようなのです」
「ほほう、それはまた」
「どうしたらいいでしょうか？何か良い考えはありませんか？」
「ありますが」
「本当ですか！？それは・・・・・・」
「それは後でお話します」
彼はそこで話を一旦切った。
「ところで」
話題を変えてきた。
「はい」
ガブリエレもそれに乗った。
「これから私がお話する事を驚かずに聞いて頂けますか？」
「？はい」
何のことかわからなかったが了承した。
「わかりました。それではお話しましょう」
彼はゆっくりと口を開いた。
「お嬢様の事ですが」
「はい」
「実は私とご主人様しか知らない秘密があるのです」
「秘密！？」
ガブリエレはその言葉を聞いて目の光を強めた。
「・・・・・・ひとつ言っておきます。これを聞いても貴方はまだお嬢様を愛せますか？」
老人は険しい顔をして問うた。
「はい。例え彼女が人の腹から生まれた者ではないにしても」
彼は強い声で言った。

「そうですか。ならばお話しましょう。お嬢様は貴族の出ではありません」
「なっ！？」
これにはガブリエレも驚いた。
「ではアメーリアは・・・・・・」
「そうです。お嬢様は本当はこの家の者ではないのです」
老人は彼を見据えて言った。その目はまるで彼の心を見ているようであった。

第一幕その三

「それは本当ですか！？」
「私は嘘は言いません。誇りにかけてそれは誓います」
「ならば彼女の本当の出生は・・・・・・」
「それは私も知りません。ご主人様はお嬢様をピサの修道院で拾われたと仰ってます」
「それはどういう経緯でですか？」
「ご主人様の本当のご息女はピサの修道院で亡くなられたのです。ご主人様がその修道院に葬儀と永遠の別れを告げる為に来られた時その前に捨てられていたのがお嬢様だったのです」
「そしてグリマルディ家の娘となったのですね」
「はい、その通りです」
「しかし何故家督まで継ぐ事になったのです？確かに形式上は一人娘だとしても」
「あの総督のせいですよ」
彼は顔を顰めて言った。
「あの男の」
ガブリエレも顔を顰めた。彼も総督とは対立しているからだ。
「あの男は事あるごとに貴族の財産を狙い奪い取ろうとしております。それを防ぐ為とやはりお嬢様がいとおしかったからです。まるで亡くなられた本当のお嬢様のようだと」
「そうですか。それはあの人らしい」
ガブリエレもこの家の当主と交際がある。非常に優れた人格者である。
「どうですか、お嬢様は貴族ではなく素性の知れぬ孤児だったのです。由緒正しき家柄である貴方はそれでもあの方を妻に迎え入れられますか？」
彼はガブリエレの目を見て問うた。

「・・・・・・当然です」
彼はそれに対して毅然として言った。
「僕はアメーリアを愛しています。これは彼女の姿と心が好きなのです。さっきも言いましたが僕は例え彼女が何者であろうとも愛しています、そしてこの気持ちは永遠に変わりません」
「そうですか」
老人はそれを聞いて微笑んだ。
「それでは認めます。貴方はお嬢様に相応しいお方です」
「有り難うございます！」
ガブリエレはその言葉に大喜びで答えた。
「そのかわりお嬢様を永遠に幸福にして下さい。あの方はそうあるべき方なのですから」
「はい、天の主と子に誓います。彼女を幸せにします」
彼は高揚して言った。その時ラッパの音がした。
「む、あの男が来たか」
ガブリエレはその音を聞いて言った。
「では私はこれで」
老人はそれを聞くとそそくさと庭を後にした。
「ごきげんよう。それでは婚礼の日に」
「はい」
二人は庭園から立ち去った。
その誰もいなくなった庭園に総督であるシモンとその部下達が入って来た。シモンの隣にはパオロがいる。皆豪奢な服に身を包んでいる。
「おや、アメーリア＝グリマルディはここにはいないのか」
シモンは庭に入ると言った。
「どうやらそのようですね。一体何処に行ったのだ、総督が来られたというのに」
パオロはそれに気付いて眉を顰めた。
「まあ待て、そんなに怒る必要は無い」

シモンはそんな彼を窘めた。
「ハッ、これは失礼」
「わかればいい。じきに来るだろうしな。ところでここはすぐに離れた方がいいぞ」
「何故ですか？」
「うむ。ガブリエレ＝アドルノがこの辺りに潜伏しているらしいのだ」
「あの男がですか！？まさかまた総督の御命を」
「おそらくな。何しろわしはあの男の父の仇だ」
「だとしたら厄介ですな」
「何、気をつけていれば心配は無い。だが油断をしてはいけないな」
「御意に」
そこへアメーリアがやって来た。
「来たか」
シモンはそれを見て微笑んだ。そしてパオロ達に対して言った。
「皆少し休むがいい。長旅で疲れただろう」
そう言うと部下達を庭から下がらせた。
「あの娘がもうすぐ俺の妻になるのだな」
パオロは下がりざま彼女の顔を見て言った。後にはシモンとアメーリアだけが残った。
「お久し振りです、総督」
アメーリアは一礼して言った。
「はい、お元気そうで何よりです。ところで」
シモンは早速彼女に尋ねた。
「貴女のご親戚はまだこのジェノヴァに帰っては来られないのですか？」
「それは・・・・・・」
アメーリアはその質問に口ごもった。シモンとは友好的な関係にあるグリマルディ家だがやはり彼と仲が良くない者もいるのだ。彼等はピサ等に亡命している。

「仕方ありませんな。ここに帰れば私に頭を下げなければならない。プライドの高い彼等はそれが嫌なのです」

その通りであった。彼等はその誇りを維持したい為に平民出身であるシモンに頭を下げたくはなかったのだ。

第一幕その四

「まあ良いだろう。そのプライドに対する礼はこれだ」
そう言うと懐から一枚の紙片を取り出した。そしてアメーリアに手渡した。
アメーリアはそれを読んだ。すると急に顔色を変えた。
「これは・・・・・・赦免状ですか！？」
「そうだ。今この街はヴェネツィアという敵と戦っている。彼等に勝つ為には内で争っていてはいけない、こうした慈悲の心も忘れてはいけないのだ」
「有り難うございます・・・・・・」
アメーリアは深々と頭を下げた。
「礼を言う必要は無い。私は政治として必要だからこうしただけだからな」
シモンは彼女を宥める様に言った。
「ところで一つ聞きたいのだが」
「はい」
アメーリアは答えた。
「貴女は何故いつもこの邸宅にいるのだ？グリマルディ家はここの他にもこのジェノヴァに多くの邸宅を持っているというのに」
「この屋敷が気に入っておりますので」
「そうか、確かにここから見える海は素晴らしいな」
シモンは海を眺めて言った。
「そしてもうそろそろ身を固めたらどうかね。恋をしてもいい頃だが」
アメーリアはその言葉に眉をピクリ、と動かした。
「それは・・・・・・」
「丁度パオロが後妻を探しているのだが」
話を振ってきた。

「それはお断りします」
「何故だ？」
「それは・・・・・・」
アメーリアは顔を俯けた。
「そんなに悪い話ではないと思うが」
このままではあの男と結婚させられる、そう思った彼女は咄嗟に言った。
「私は実はこの家の者ではないので」
「えっ！？」
シモンはそれを聞いて思わず驚いた。
「私はピサの修道院の前で捨てられていたのです。そしてそこをお養父様に拾われたのです」
「何と、そういうことだったのか」
「はい。私は本当の両親の顔を知りません。唯一つの手懸かりはこれだけです」
そう言って胸のペンダントを見せた。
「それは・・・・・・」
シモンはそれを見てハッとした。
「生まれた時から私の首にかけられていたもの。この中にある肖像がお母様だと思うのですけれど」
ペンダントを開けた。するとその中に美しい女性の肖像があった。
「・・・・・・・・」
シモンはその肖像を見て沈黙した。彼は自分の首をまさぐった。
「これを見てくれ」
そして胸に架けてあるペンダントを見せた。それはアメーリアが着けているのと全く同じものであった。
「あっ・・・・・・」
中にある肖像も同じであった。アメーリアもそれを見てハッとした。
「私にもかって娘がいた。生き別れのな」

シモンは静かに語りはじめた。
「二十五年前に生き別れたのだ。八方に手を尽くして探したが遂に見つからなかった」
「・・・・・・・・・」
アメーリアはそれを黙って聞いていた。
「私は娘にペンダントを与えていた。自分が持っているのと全く同じものをな」
彼は言葉を続けた。
「そしてそれを持つ者こそ私が長い間捜し求めていた娘なのだ」
「では私は総督の・・・・・・」
アメーリアはそれを聞いて身体が震えるのを覚えた。
「そうだ、そなたは私の娘なのだ」
それはシモンも同じであった。長い間捜し求めていた娘が今ここにいるのだ。
「こんなところでお会いするなんて・・・・・・」
「それは私も同じだ。これも神の御導きか・・・・・・」
二人はヒシ、と抱き合った。涙が零れる。
「マリア、ようやく会えた」
「それが私の本当の名前ですのね」
「そうだ、心優しき聖母の名だ」
シモンは娘の顔を見て言った。
「私は長い間一人だった。そしてそなたを捜し求めていた。だが今ここにこうして出会えた。もうこれで満足だ。私の願いが遂にかなったのだ」
「出会える筈もないと思っていた本当の親に出会えるなんて・・・・・・。これが奇跡でなくて何なのでしょう」
「私はもう一人ではないのだ」
「これで私は孤児の哀しみから解き放たれる」
二人は口々に言う。
「場所を変えよう。つもる話がある」

シモンは娘を屋敷の中へ導いた。
「はい」
娘はそれに従った。こうして二人は出会いの喜びを二人で確かめ合ったのだ。

第一幕その五

その後シモンはある静かな部屋に入った。パオロも一緒である。
「ここなら誰もいないな」
シモンは辺りを見回して言った。
「総督、お話とは何でしょうか」
パオロは不思議そうな顔をして彼に尋ねた。
「うむ。そなたの結婚の事だが」
「はい」
パオロの顔に期待の色が入った。パッと明るくなる。
「諦めるがいい。そなたにはもっと相応しい者がいる」
「えっ・・・・・・」
パオロの顔が絶望に支配される。
「総督、それはどういう意味ですか！？」
「そのままだ。彼女との結婚は諦めよ」
「そんな、総督だって賛成してくれたではないですか」
彼はなおも食い下がる。
「事情が変わったのだ。そなたも男ならずっぱりと諦めよ。良いな」
シモンはそう言うとその場を後にした。
「クッ、一体どういう事だ」
シモンはそれを見送ると歯軋りして呻いた。
「事情とはどういう事だ。そのそも総督が勧めてくれた事だというのに」
彼は閉じられた扉を見る。怒りと憎しみが沸々と湧いてきた。
「大体総督になれたのも返り咲く事が出来たのも俺のおかげではないか。その恩義まで忘れるとは」
彼にも自負がある。そしてそれはみるみる肥大化していった。
「クソッ、ならば俺にも考えがある」
彼はその場を後にした。そしてピエトロのいる部屋に向かった。

そして事情を話した。
「それは気の毒に」
ピエトロは社交辞令的に言った。
「ああ、全くはらわたが煮えくり返る思いだ」
彼は歯軋りしながら言った。
「それでどうするつもりだい？他に誰かいい女はいるのかい？それとも今から探すか？」
彼はパオロに対して言った。
「探す？馬鹿を言わないでくれ」
彼は顔を顰めて言った。
「ではどうするつもりだ？」
ピエトロはそんな彼に対して言った。別に彼の様子がおかしいとは思っていない。
「諦めてやもめ暮らしを続けるか？」
普通はそう考えるだろう。しかし今の彼は常軌を逸していた。
「俺がそんなたまか。かっさらってやるのさ」
彼は顔に陰惨な陰を漂わせて言った。
「・・・・・・おい、何を馬鹿な事を言ってるんだ」
彼はそれを聞いて驚いてそれを止めようとした。だが無駄だった。
「いや、やってやる。ここまできたら止められるか」
パオロは顔を獣のようにして言った。
「夕方になるとあの娘は何時も一人で浜辺にいる。その時を見計らってさらうんだ。そして俺の家まで連れて行く」
「本当にやる気か！？」
ピエトロはパオロの顔を見て言った。
「ああ。協力してくれるか」
パオロは逆にピエトロの顔を見据えて問うた。
「・・・・・・・・・・」
ピエトロは彼の顔を見ながら考えた。彼との付き合いは長い。その間共に多くの事をやってきた。無論悪事も。シモンに見つからぬ

よう二人で隠蔽しながらやってきた。こっそりと貴族を暗殺しその財産を懐に入れる事もやった。彼等にとって貴族とは憎むべき敵でしかないのでこれは悪事とは思っていなかったが。

そういったことから二人は一蓮托生の間柄であった。片方がいなくなればもう片方もいなくなる運命なのである。

「・・・・・・わかった」

ピエトロは納得した。納得せざるを得なかった。

「そう言うと思っていたよ」

パオロはそれを聞いてニヤリ、と笑った。

「その代わり分け前は弾んでくれよ」

ピエトロもそう言うと笑った。

「おお、勿論だとも」

二人は手を握り合うとその場を後にした。

第一幕その六

それから数日後。シモンは市の会議室にいた。
彼は総督用の専用の豪奢な造りの椅子に腰掛けている。そして彼の右手には貴族出身の議員達がいる。十二人いる。そして左手には平民出身の議員達がいる。これも十二人である。その中にはパオロとピエトロもいる。彼等は激しく睨み合っている。そしてジェノヴァの海事を司る審議官が四名と軍の司令官達がいる。彼等はシモンと向かいに座り貴族や平民達の間に割って入る形となっている。
「さて、本日の議題だが」
シモンは彼等を前にして口を開いた。
「モンゴル帝国から使者が来た」
「ほう、あの国から」
一同その言葉に反応した。この時代モンゴルは分裂し衰えが顕著になっていたとはいえその勢力はまだまだ侮れないものであったのだ。
「講和の贈り物とそれとは別の贈り物を持参して我々の船に対して黒海を開きたいと申し出てきている。同意するかね？」
「はい」
一同それに同意した。
「よし、この件はこれでよし。今日はもう一つ重要な議題がある」
「それは？」
一同シモンへ顔を向ける。
「これだ。これはペトラルカからの伝言だ」
「ペトラルカから？」
ペトラルカとはルネサンス期の詩人である。ヴェネツィアと関係があり彼等には快く思われてはいなかった。
「リエンツィの運命を予言した自分が言おうと言っている」
リエンツィとはローマ最後の護民官である。法皇のローマ復帰や

新憲法の制定に尽力したが貴族との闘争に明け暮れ彼等が煽動した民衆により命を落としている。
「ほう、またえらくご親切に」
パオロが露骨に顔を顰めてみせた。
「その予言と同じ響きがこのジェノヴァにも響いてきているそうだ。そしてヴェネツィアと講和してはどうかと言って来ている」
シモンの言葉が終わるとピエトロが口を開いた。
「相変わらずですな、また連中の太鼓持ちですか」
口の端を歪め皮肉を込めて言った。
「そんな事言っている暇があったらアヴィニョンにいる女との関係の清算でもしたらどうかな」
彼の交際について揶揄する。
「そうですな。そんな男の戯言を聞く必要はありません」
パオロも彼に同調して言った。
「総督、迷う必要はありません。連中の息の根を止めてやりましょう」
「そうだ、あの連中を海に沈めてしまえ」
平民派の議員の一人が言った。
「そうですな。そうすれば我等の最大の敵が減ります」
他の左側の議員達もそれに同意した。それに対して貴族派の議員達は主導権を取られて面白くなさそうだが賛成はしている。
「諸君はそう思うか。そうだな、やはりここは彼等を叩いておくか」
シモンもそれは同じであった。彼等の意を汲む形でそれを決めようとしていた。
「そうなさるべきかと」
一同それに賛同した。そしてそれは決定した。
「よし、この件に関しても決定だ。ヴェネツィアには近いうちに艦隊を送り込むことにしよう。規模及び司令官は後程決定する」
「異議なし」
この件も程無く終了した。

「これで外交は終わりだな。さて、次は内政に関してだが」
シモンが言葉を続けようとしたその時だった。不意に外で騒ぎが起こった。
「何だ！？」
一同ハッと騒ぎが起こった方へ顔を向けた。
「フィエスキの広場の方だな」
それはジェノヴァ市民の憩いの場所の一つである。
一同バルコニーへ出た。そして広場の方を見る。
「暴動か！？」
見れば大勢の群集がある一団を追い立てている。
「亡命者の連中か！？誰かが騒ぎを起こしたのか」
「それにしては様子がおかしいぞ」
彼等はめいめい話し合う。シモンはそれを冷静に見ていた。断を下す為だ。
「待て。暫し様子を見てみよう」
シモンは彼等に対し言った。
「見たところ群集は平民みたいだな」
パオロは目を凝らして言った。
「やっつけろ！」
群集は口々に叫んでその一団を追い立てている。かなり興奮しているようだ。
「おい、あの若い男は」
ピエトロは追い立てられている一団の中にいる若い男を指差してパオロに囁いた。
「どうした？」
シモンはそれに気が付いた。ピエトロに尋ねる。
「いえ、あそこにいる若い男ですけど」
そう言ってシモンにもその若い男を指し示した。
「何だ、あれはガブリエレ＝アドルノではないか」
それはシモンも認めた。何やら剣を振るって興奮した群集から必

死に逃げている。
「一体何があったんだ？」
シモンはそれを見ていぶかしんだ。パオロとピエトロはヒソヒソと話している。
「おい、まずいぞ」
ピエトロはパオロに対して言った。
「ああ、あの計画が奴にばれたらしいな」
パオロは横目でガブリエレ達を見ながら言った。
「すぐにこの場から逃げろ。さもないと大変な事になるぞ」
「ああ」
パオロはピエトロの言葉に従いその場をこっそりと立ち去ろうとする。だがシモンがそれに気付いた。
「パオロ、何処へ行くのだ！？」
「ちょっとトイレへ」
咄嗟に誤魔化そうとする。だがそれは通用しなかった。
「今この場を離れる事は許さん。悪いが我慢しておいてくれ」
「はい・・・・・・」
パオロはうなだれてそれに従った。扉は海事審議官達が固めた。彼等仕方なくバルコニーへ戻った。
「貴族共をやっつけろ！」
群集が叫んだ。
「何っ！」
それを聞いて貴族出身の議員達の顔色が変わった。
「人民万歳！」
また群集達が叫んだ。
「また御前等の煽動か！？」
そう言って平民出身の議員達を睨み付けた。
「面白い、またそうやって言い掛かりをつける気か」
平民の議員達もそれに対して黙ってはいない。逆に睨み返す。場を不穏な空気が支配した。

「待て、そんなにいがみ合ってどうするつもりだ」
シモンが彼等の間に入った。そして双方を宥めようとする。そこへ群集がまた叫んだ。
「総督を殺せ！」
今度はシモンに対してだ。これは追われているガブリエレ達の言葉の様だ。シモンはそれを聞いて毅然とした態度で言った。
「私を殺せ、か。面白い」
そう言うと側に控えていた書記官の一人へ顔を向けた。
「この官邸の戸口を開けよ」
「えっ！？」
それを聞いて一同驚いた。
「そしてあの広場にいる者達に伝えよ。ここに来るがいいとな。私が待っていると」
「しかし・・・・・・」
書記官はそれを聞いて口籠もった。

第一幕その七

「良い。私は猛り狂った者達など恐れはせぬ。彼等を説き聞かせ落ち着かせるのが私の仕事だ。さあそれがわかったら早く行くがいい」
「わかりました」
書記官はそれに従いその場を後にした。
「聞いたな、今の私の言葉を」
シモンは議員達に向き直って言った。
「はい」
議員達はそれに対して答えた。
「ならば気を鎮めよ。市民の代表としてな。わかったな」
「はい」
議員達はそれに従い気を落ち着かせた。
群集はまだ叫んでいた。だがすぐにそれも止んだ。
「収まったか」
そして突如叫び声が再び起こった。
「万歳！」
それはシモンを称える声だった。
「総督万歳！」
そして彼等は官邸へ入って来た。
彼等はすぐに会議室へと入って来た。皆平民達である。年寄りもいれば女も子供もいる。その手にはめいめいハンマーやツルハシ等得物を手にしている。彼等は自らの代表である平民出身の議員達の周りに来た。そして貴族出身の議員達を睨んでいる。
「ガブリエレ＝アドルノはどうした？」
「こちらに」
シモンの問いに対して一人の髭を生やした男がガブリエレを引き立てて来た。両手を後ろで縛られている。アメーリアの養育係であるあの老人も一緒だ。

「ム・・・・・・！？」
シモンはその老人の顔を見て何か思ったようだ。だがすぐにそれは単なる思い過ごしだと考えた。
（あの男は死んだという。ここにいる筈はない）
そして群集達に対して問うた。
「諸君、一体何をそんなに興奮しているのだ？」
「決まってます、復讐です！」
彼等はそう言ってガブリエレと老人を憎悪に満ちた目で睨んだ。
「その二人が何かしたのか？」
「ええ、人殺しですよ、こいつ等はロレンツィーノさんを殺したんです！」
ロレンツィーノとは平民の実力者である。裕福な商人でパオロやピエトロとも関係が深い。
「おい、やっぱりそうみたいだぞ」
ピエトロはそれを聞いてパオロに囁いた。
「ああ、かなりまずいな」
パオロは顔を顰めた。
「これが民衆の声か？まるで血に飢えた野獣ではないか」
シモンは興奮する民衆に対して言った。
「このジェノヴァに多くの者が法による判決無しで人を殺すという法は無い。アドルノよ、そなたは一体何をしたのだ？」
シモンは改めてガブリエレに対して問うた。
「彼等の言う通りです。ロレンツィーノを殺しました」
彼は悪びれもうなだれもせず頭を上げて言った。
「それ見ろ、こいつは罪人だ！」
民衆達が叫ぶ。
「鎮まれ！」
シモンはそんな彼等に対して叫んだ。民衆はその声に沈黙した。
「何故彼を殺したのだ？」
改めてガブリエレに対して問うた。

「グリマルディ家の娘をさらおうとしたからです」
「何っ！」
シモンはそれを聞いて狼狽した。
「いや、それは本当か」
だがそれをすぐに打ち消した。そして再び問うた。
「ええ、本当です。そして死に際にある事を言い残しました」
「ある事！？」
パオロとピエトロはそれを聞いて顔を蒼ざめさせた。
「どうせ嘘に決まってる」
民衆の中の何人かが囁いた。だがガブリエレはそれに構わずに言葉を続けた。
「あの男が言いました。ある人物に唆されてやった、とね」
そう言ってシモンを見た。眼には憎悪の炎が宿っている。
「おい、まずいな」
「ああ、完全にばれている」
パオロ達は完全に蒼ざめている。そしてヒソヒソと小言で話し合う。
「そしてその男の名は！？」
シモンは冷静さを装って尋ねた。
「御安心下さい。あの男はそれを言う前に息絶えました」
口の端を歪めて皮肉っぽく言う。それは明らかな揶揄だった。
「嘘だな」
シモンはそれに対してすぐに言った。
「本当は誰だか言い残しているな」
「お聞きになりたいですか？」
ガブリエレはそんな彼を睨みながら言った。
「当然だ。法の下審議する為にもな」
彼の心には娘を害しようとした者への怒りが隠されていた。だがそれは隠している。
ガブリエレの心は恋人をさらおうとした者への怒りで燃え盛って

いた。それは表に出ていた。
「そうですか、では言いましょう」
ガブリエレはシモンを見据えて言った。
「おい、何か様子が変だぞ」
ピエトロがパオロのみ身元で囁いた。
「ああ、一度も俺達を見ないで総督ばかり見ているな」
「ご自分の胸に心当たりはありませんか？」
ガブリエレはシモンに対して言った。

第一幕その八

「私のか？」
シモンはその言葉に顔を顰めた。
「そうですよ、ご自身で命令したというのに！」
ガブリエレは手を掴んでいる群衆から離れ彼を指差して叫んだ。
「何！」
それを聞いてシモンもその場にいる議員や群集達も思わず驚きの声をあげた。
「嘘をつけ、総督がその様な事を為されるか！」
群集の一人が叫んだ。
「そうだ、こいつは自分の罪を総督になすりつけろうとしているんだ！」
パオロが咄嗟に叫んだ。この際全ての嫌疑をガブリエレに被せて消してしまおうと考えたのだ。
「信じないか、だが私の潔白は神が御覧になっている！」
そう言うと腰の剣を引き抜いた。
「覚悟しろ、シモン＝ボッカネグラ！」
そう言うとシモンに跳びかかろうとする。だがそれは出来なかった。
「見ろ、人殺しがまた剣を抜いたぞ、今度は総督を殺す為にな！」
パオロは群集を煽る様に叫んだ。
「そうはさせるか！」
群集がガブリエレに逆に跳びかかる。
「クッ、何をする！」
彼はそれを必死に振り払おうとする。だがそれは出来なかった。
多勢に無勢で取り押さえられた。
「おのれっ、ここまで来て！」
取り押さえられながらシモンを決死の形相で睨み付ける。パオロ

とピエトロはそれを見てにんまりと笑った。シモンは身じろぎもせず彼を見ている。
「さっさと処刑場へ連れて行け！」
パオロが叫んだ。しかしその時だった。
「待って下さい！」
会議室に誰かが入って来た。アメーリアである。それを見たパオロとピエトロの顔が真っ青になった。
「アメーリア・・・・・・」
ガブリエレが彼女の姿を認めてその名を呼んだ。彼女はシモンとガブリエレの間に割って入る。そして恋人を庇う形で言った。
「彼の言った事は本当です。彼は私を助けようとしただけです」
「本当か！？」
群集も議員達も彼女の言葉に耳を傾ける。パオロとピエトロは群集の中にコソコソと隠れる。
「ですから総督・・・・・・」
シモンを見る。娘として。
「彼を助けて下さい」
懇願した。シモンはそれを黙って聞いていた。
「・・・・・・・・・」
チラリとガブリエレを見る。まだ自分を睨んでいる。だが取り押さえられ剣も奪われている。
「手荒な真似はするな」
彼を取り押さえている群集達に対して言った。
「もう害は無い。そこまでする事もあるまい」
群集達はそれに従った。ガブリエレは縛られたがそれだけに留まった。
「ではアメーリア」
シモンはそれを見届けるとアメーリアに顔を向けて問うた。
「では事情を話してはくれないか。そのさらわれそうになった経緯を」

「はい」
アメーリアはシモンに一礼して口を開いた。
「あれは心地良い夕方のことでした」
パオロとピエトロはそれを聞いて身体をさらに奥へ隠そうとする。
「どうしたんですか、お二人共」
市民の一人がそれに気付いた。
「いや、何も」
二人はそれを必死に誤魔化す。その間もアメーリアの告発は続く。
「その時刻私はいつも浜辺を散策しているのですがその時三人の暴漢に取り囲まれ小舟に押し込まれたのです」
「それはご災難でしたね」
貴族出身の議員の一人が言った。彼はガブリエレと親交のある議員である。
「はい。そして私が連れて来られたのはロレンツィーノの邸宅だったのです」
「何とそれでは彼の言った事は正しかったのか」
皆ガブリエレの方へ顔を向けた。
「そうです。そしてその邸宅にこの方が駆けつけてくれたのです。偶然私がその邸宅に連れ込まれるのを見て」
「それは非常に幸運でしたね」
その貴族の議員が言った。そうしてガブリエレを擁護しようと話を回そうと仕向ける。
「はい。これも神のご加護とこの方のお力あっての事です」
「では貴方はレディーを救った高潔な方ということになる」
議員はそう言ってガブリエレを見た。
「その通りです」
アメーリアもそれに同意した。彼女はさらに言葉を続けた。
「しかしロレンツィーノの後ろには黒幕がいたのです。私はそれを告発する為にここへ来たのです」
「それは誰だ!?」

「まさか・・・・・・」
群集達の脳裏に先程のガブリエレの言葉が浮かぶ。
「いえ、総督ではありません。総督は私を常に護って下さいます」
彼女はそれを否定した。シモンはそれに対し目でアメーリアに礼を言った。
「では誰なんだ」
群集達が少し前に出た。その時パオロとピエトロの姿がアメーリアの目に映った。目が合った。
それを見たアメーリアの目の色が変わった。パオロとピエトロの顔がさらに青くなった。最早蒼白である。
「その者は今ここにいます」
「えっ！」
アメーリアの言葉に一同騒然となった。

第一幕その九

「それは誰なんだ！？」
皆口々に言った。そのうち誰かが言った。
「貴族の奴等がしたに決まってるさ」
平民の議員達と群集がその言葉に反応した。
「そうか、またやりやがったか」
その中の一人が言った。
「ああ、全く懲りない奴等だ」
平民達は貴族を睨み付けた。今にも跳び掛かり打ち殺さんばかりである。
「おい、出鱈目を言うな」
貴族の議員の一人が言った。
「何故我々が彼女を害さなければいけないのだ。そもそもロレンツィーノは平民だろうが」
さらに別の者が言った。
「そうだな、事件の経緯からするとこれは平民だ」
「いつも我々に罪を着せようとするな！」
そう言って反発する。場は二つに別れた。
「さっさとその剣を棄てろ！」
平民達が叫ぶ。剣は貴族の象徴である。つまり街から出て行けというわけだ。
「そちらこそ斧を棄てろ！」
貴族達が言い返す。斧は平民の象徴である。これも同じ意味だ。
場は一触即発の状況となった。だが数では平民たちの方が上である。しかも得物を手にする群集達までいる。彼等はそれを頼みに今にも襲い掛かろうとしていた。
貴族達も引くつもりは無い。彼等とて誇りがある。会議室は流血の舞台になろうとしていた。

「待て！」
その場を鎮めたのはシモンであった。彼は睨み合う双方の間に入った。
「そうやっていがみ合って何になるのだ。血を分けた者同士が争って何の利になるというのだ」
彼は双方を睨みながら言った。
「この美しい海の街が血で赤く染まる。それは悲しむべきことだ。我等は共にこの太陽の光やオリーブの枝を分かとうと誓ったのではなかったのか。それをどうして事あるごとに睨み合わなければいけにあのだ」
言葉を続ける。
「そうした醜い争いを私は非常に悲しく思う。そしてこの街の本当の意味での栄華、そして平和と愛を心から願いたい」
「・・・・・・・・・」
一同それを聞いて鎮まりかえった。そしてシモンに対し頭を垂れた。
「わかってくれたか。ならば剣と斧を納めようではないか」
「ハッ」
皆シモンの言葉に従う。だがその中で別の動きをする者達がいた。
「おい、これはこの街を逃げ出すしかないぞ」
ピエトロがパオロに囁いた。
「さもないと俺達は打ち首だ。今度は俺達が斧にやられる」
「いや、大丈夫だ」
パオロは顔を青くさせたままで言った。
「俺に考えがあるからな」
そう言ってガブリエレを見た。
「あの貴族の馬鹿息子を上手く使えばまだ何とかなるぞ」
もう一人別の動きをする者がいた。あの老人である。
しかし彼は別に動いても誰かに囁いてもいるわけではない。群集達から解放されただ立ってシモンを見ているだけである。

その目は憎悪に燃えている。そしてシモンを見ながら内心呟いていた。
（何時までもそうやって権力の座にいられると思うなよ）
憎々しげにそう呟いた。
（今に思い知らせてやる。わしの長年の恨みと復讐をな）
だがそれに気付く者はいなかった。彼は一人シモンを睨み続けていた。
（あの老人・・・・・・）
シモンもそれに気付いていた。彼をチラリ、と見る。
（恐ろしい程似ている。だがもう死んでいる筈だからな）
そう思い直しガブリエレへ顔を向けた。
「ガブリエレ」
「はい」
彼は答えた。
「そなたはとりあえず収監する。暫くは大人しくしておくがいい」
「わかりました」
ガブリエレは衛兵達に連れられてその場を後にする。アメーリアはそれを心配そうに見送る。
「さて、後は・・・・・・」
パオロへ目をやる。
「パオロ」
「は、はい」
顔が蒼ざめているのを不思議に思った。だがそれは放っておいた。
「そなたに今回の誘拐事件の真犯人の捜査を命じる。そなたに市民の厳粛な法と名誉を委ねよう」
「わかりました」
パオロはそれを了承した。断ることは出来なかった。
「その者はこの部屋にいるという。ならば捜査は容易な筈。おそらく今私の話を聞き顔を青くし震え上がっていることだろう。そう、今この場所でな」

パオロはそれを聞きながらアメーリアをチラリ、と横目で見る。
彼を睨みつけている。
「私はその者を決して許しはしない。白日の下に曝し懲罰を与えてやる。そしてその者に言おう」
そこで彼は一息置いた。
「呪われよ！とな。この者には必ずや神の裁きが加えられる」
そう言うとパオロを見た。
「そなたも繰り返すがよい。そして必ずや犯人を見つけ出すと誓え」
「わかりました・・・・・・」
彼は青くなった唇で歯が鳴るのを必死に抑えながら言った。
「呪われよ！」
彼はこの時恐ろしくなった。まさか自分で自分に呪いをかけることになろうとは。
（恐ろしい・・・・・）
彼は心の中で呟いた。アメーリアはそんな彼を睨み続けている。
「犯人よ、今ここにいるのなら姿を現わせ！」
ガブリエレが叫んだ。
「そうだ、逃げていないで出て来い！」
それを受けて貴族の議員の一人が言った。
「呪われよ！」
彼等が叫んだ。パオロはそれを聞きながら自分の身に破滅の時が近付いている事を感じていた。

第二幕その一

第二幕　官邸

シモンは官邸に住んでいる。ここには彼の住居の他に執務室や先程の会議室等がありジェノヴァの政治の中心となっている。豪壮で周りを威圧させるような造りになっている。

あの事件が起こった刻のことである。シモンは真犯人の捜査をパオロに任せ他の政務に当たっている。当のパオロはその真犯人が他ならぬ自分自身の為ろくに捜査などしてはいなかった。

その官邸のテラスに彼はいた。ピエトロと一緒である。彼等はそのテラスから市中を見下ろしながらテーブルに着いている。その上には壺が中央に一つ、そしてカップが二つ置かれていた。

「あの二人を使うか」

パオロは茶を飲みながらピエトロに言った。この時茶はかなり高価なものであった。

「ああ、それしかないな」

彼もそれに同意した。

「じゃあこれを渡そう」

パオロはそう言うと懐から一つの鍵を取り出した。

「これであの二人を牢屋から引き出してくれ。秘密の廊下を使ってな」

「あそこか」

この官邸はいざという時に備え多くの隠し通路や隠し扉がある。そのことを知っているのはシモンの他には彼の腹心であるこの二人だけだ。

「この鍵で廊下への扉は開くからな。頼んだぞ」

「わかった」

ピエトロは鍵を受け取るとその場を後にした。

「急げよ、一刻も早く高飛びしばくちゃいけないからな」

パオロは走り去るピエトロの背中に対して声をかけた。
「さて、と」
パオロは立ち上がりジェノヴァ市内を見回しながら呟いた。
「まさか自分で自分を呪い誓いまでさせられるとはな。恐ろしいことだ」
彼はそう言うと忌々しげに顔を顰めた。
「すぐにこの街を逃げ出さないとな。さもないと断頭台に上がるのは俺になっちまう。今まで貴族の奴等を難癖つけて片っ端から送った場所に今度は俺が行くことになる」
そう言うと広場の方を見た。処刑はその広場で行なわれるのだ。
「それだけは御免だ。俺は何としても生き延びてやる」
テーブルの前に戻った。そしてカップに残った茶を飲んだ。
「その前に総督だけは何とかしないとな」
壺を手に取った。そしてカップに茶を注いだ。
「追っ手を差し向けられたら厄介だ。それに思い知らせてやらないとな」
再び茶を口に含んだ。
「一体誰のおかげで総督になれてしかも返り咲けたと思ってるんだ。恩知らずが」
完全な逆恨みであった。だがそれは彼にとっては当然の理屈であった。
「この中にゆっくりと忍び寄るドス黒い苦しみを注いでやるか」
彼はそう言うと壺を見た。
「そして殺し屋も用意する。二段の備えだ。さて、どちらにやられるかな」
そう言うとニヤリ、と笑った。悪事に身を浸す悪魔の笑いであった。
ピエトロが戻って来た。ガブリエレと老人を連れている。
「早かったな」
「ああ、こちらも急いでいるものでな」

ピエトロはいささか焦りながら言った。
「ご苦労。それじゃあ先に行っておいてくれ」
「わかった。あの場所で落ち合おう」
「ああ」
ピエトロは逃げる様にその場から姿を消した。
「また悪事を企んでいるようだな」
老人はそんな二人を見て言った。
「それがあんたにどういう関係がある？」
パオロは居直って彼に対し言った。
「ヤコブ＝フィエスコ。あんたも本来ならこの街にはいられない筈だがな」
「えっ！？」
ガブリエレはその名を聞いて驚愕した。彼の名はこのジェノヴァで知らぬ者はいなかった。かってシモンの最大の敵として彼と争った貴族達の領袖の一人であったのだ。
「・・・・・・何処でそれを知った」
彼はそれを否定することなく問うた。
「流石だな。てっきり否定すると思ったが」
彼はそれを見て口の左端を吊り上げて笑った。
「わしを馬鹿にしてもらっては困るな。これでもフィエスコ家の主だ」
「もう廃れてしまった旧家のか」
彼は皮肉を込めて言った。フィエスコはそれには答えなかった。
「まあそんなことは今はどうでもいい。あんた達に頼みがあってここへ来てもらった」
「何だ！？悪事なら一人でやればいい」
フィエスコは嫌悪感を込めて言った。
「相変わらず頑固だな。それが家を没落させる原因となったというのに」
「誇りと言ってもらうか。卑劣な事や悪事はフィエスコ家にとって

は最も忌むべきものだからな」
「やれやれ。あんたにとってもいい話なんだが。ガブリエレさん、貴方にもね」
彼はそう言うと水を飲んだ。そして二人に対してあえて友好的に微笑んだ。

第二幕その二

だがそれは顔だけであった。その目は憎悪と怨みで燃え盛っていた。

「その目でか」

フィエスコはその目を見て言った。

「その禍々しい目で」

「フン、まあ落ち着け」

彼は水を勧める。だがフィエスコはそれを受け取らなかった。

「あんた達が俺を嫌っていようがこの際どうでもいい。まあ俺の話を聞いてくれ」

「何が望みだ？」

フィエスコは彼を睨み付けて言った。

「そう怒るな。俺はあんたに復讐の機会を与えようというのだ」

「あの男を殺せというのか？」

「そうだ。他ならぬあんたの手でな。どうだ、悪い話ではないだろう？」

「・・・・・・・・・・・」

フィエスコはその話を聞き沈黙した。パオロはそれを見て内心ほくそ笑んだ。話を続ける。

「思い出せばいい。あの男があんたに何をしてきたかを。そう思うと自然に怒りが込み上げて来るだろう？」

「・・・・・・確かに」

「ならばわかっている筈だ。あの男が眠っている時にこれでひと思いにやればいい」

そう言うと懐から一本の短刀を取り出した。

「刃に毒を染み込ませた特別製だ。これならかすっただけでも命を奪えるだろう」

「・・・・・・・・・・」

フィエスコはその短刀を黙して見下ろした。
「さあ受け取るがいい。そしてあの憎っくき男をその手で殺すんだ」
パオロは言葉巧みにフィエスコを仲間に誘おうとする。だが彼はそれに乗らなかった。
「・・・・・・断る」
彼は毅然として言った。
「何故だ？折角憎い奴をその手で殺せる絶好の機会だというのに」
「確かにわしはあの男が憎い。だが暗殺しようとは思わぬ」
彼は言った。
「いずれあの男をこの手で倒す時が来る。それは神の御導きによってな。わしはあの男を正面から向かって倒すのだ」
「では暗殺しようとは思わないのだな？」
「当然だ。わしは刺客などというものは嫌いだ」
彼はそう言うと短刀から目を逸らした。
「早くその醜いものをしまうがいい。見るだけで汚らわしい」
「・・・・・・そうか、ならば仕方がないな」
パオロはそれを見て舌打ちして言った。
「とっとと牢屋へ戻れ」
「言われなくとも自分で戻る。わしは貴様を見るよりあそこにいた方が心地良い」
そう言うと自分で去って行った。
ガブリエレもそれに従おうとする。だがパオロがその前に立ち塞がった。
「まあ待て」
「暗殺なら僕もお断りだ」
ガブリエレは顔を顰めて言った。
「フン、お貴族様というのはどいつもこいつも気位が高いな」
彼は皮肉を言った。
「誇りと言ってもらおうか。少なくとも御前のような卑劣で身勝手な男ではないつもりだ」

「そうか。それは結構。だがいささか鈍感なようだな」
「侮辱か！？生憎貴様の様な男が何を言おうと獣の吠え声として受け取らせてもらう」
「獣か、これはいい」
パオロはその言葉にクックック、と笑った。
「何がおかしい」
「いや、獣は鼻が利くからな」
彼は自分の鼻を指差して言った。
「それがどうした？御前が普通の人間より鼻が利こうが僕には関係無い」
「そうだな。ここにアメーリアがいる事を嗅ぎ付けるだけだからな」
彼はそう言うとガブリエレを見て卑しい笑みを浮かべた。
「それはどういう意味だ！？」
ガブリエレはその言葉にくってかかった。
「いや何、総督の寝室にいると言ったのだ」
「それは本当か！？」
彼はその話を聞いて顔を蒼白にさせた。
「俺はもうすぐこの街から高飛びする男だ。今更嘘など言うものか」
彼はその卑しい笑みをたたえたまま言った。
この時フィエスコがいたならば彼の言葉が嘘であると見破っただろう。だがガブリエレはそれを見破るにはあまりにも若かった。そして純真であった。
「そんな、では彼女は・・・・・・」
彼は声を震わせた。
「そうさ、毎夜総督の快楽の慰み者になっている」
彼はガブリエレを煽り立てる様に言った。
（上手く毒が回ってきたな。馬鹿な奴だ）
彼はガブリエレを煽り立てながら見ている。そしてその様子を楽しんでいた。
「おのれ・・・・・・」

ガブリエレは顔を上げた。その顔は怒りと憎しみで上気し真っ赤になっていた。
「それでどうするつもりだ？」
パオロはそんな彼に対して問うた。彼は即答した。
「決まっている、あの老いぼれに神の裁きを与えてやる！」
彼は激昂して言った。
「どうやってだ？」
パオロはそんな彼を嘲笑する様に言った。
「この官邸の中でか？それこそここが御前の墓場になってしまうぞ。よく落ち着いてからものを言うのだな」
「クッ・・・・・・」
あからさまな嘲笑であった。だがガブリエレは言い返せない。その通りだからだ。
「まあ誇りは死なぞ怖れないというがな。それでもいいというのなら俺は止めはしないがな」
それとなく彼を煽動する。
「しかし武器も無いのだぞ。よく考えてから何事も為すのだな」
そう言うと先程の短刀をさりげなくテーブルの上に置いた。
「だが俺はこれ以上は言わん。もうこの街から逃げ去らわなくてはならんからな」
彼はガブリエレに背を向けた。
「好きにするがいい。その誇りに忠実にな」
彼はそう言い残すと姿を消した。その顔は邪悪な笑みで満ちていた。しかしそれはガブリエレには見えなかった。
テラスにはガブリエレ一人だけが残った。彼は怒りと屈辱に身体を震わせながら立っていた。
「あの男がアメーリアを自分のものにしているというのか」
彼は声を震わせて呟いた。

第二幕その三

「僕の父を殺し今度は僕の愛しい人まで汚すというのか」
次第にその声がうわずってきた。
「許さん、有さんぞ悪党め！」
叫んだ。夜のジェノヴァに響く。
「天に座す神に誓おう、たとえ僕がどうなろうとも構わない、貴様だけはこの手で殺す、一撃では楽にはしない、そのおぞましく卑しい所業に相応しい罰を与えてやる」
その時テーブルに置いてある短刀に気付いた。
「これはさっきの・・・・・・」
パオロがわざと置いていったものだ。だがそれはどうでもよかった。これで憎い男に報いを与える武器が手に入ったのだから。
「そしてあの愛しい人をこの手に奪い返す。あの天使の様に清らかな人を。しかし」
彼はそう言うと表情を暗くさせた。
「もし心まで穢れているのならば・・・・・・。最早僕は彼女を愛することは出来ない」
そう言うと椅子に崩れ落ちた。
「こんなことをしている場合じゃないな」
彼はふと気付いた。
「行くか。あの男に神の裁きを与えに」
その時テラスの入口に誰かがやって来た。ガブリエレは短刀を咄嗟に懐へ隠した。
「ガブリエレ」
それはアメーリアだった。
「誰に牢屋から出してもらったの！？」
彼女は彼の姿を認めると尋ねてきた。
「それは・・・・・・」

ガブリエレは口ごもった。
「それよりも貴女が何故ここに！？」
疑念が現実味を帯びてきたように感じた。
「えっ、私は・・・・・・・」
だが彼女が言うより早くガブリエレは言った。
「まさかあの男に・・・・・・・」
「あの男って？」
アメーリアには話が読めない。
「決まっている。総督だ。君はあいつの寝室に行っていたんじゃないのか！？」
「私が！？」
彼女はその言葉に驚愕した。
「そんな・・・・・・有り得ないわ」
彼女はそれを必死に否定した。
「しかし今こうやってこの官邸にいるじゃないか」
「それはわけがあって」
「誤魔化すつもりかい！？自分の淫らな行いを！」
ガブリエレは激昂して叫んだ。
「ガブリエレ、落ち着いて私の話を聞いて！」
彼女はそんな恋人を必死に宥めようとする。
「そうして僕に嘘を言うつもりかい！？今までのように」
だが彼は気が昂ぶっていてどうにもならない。アメーリアはそれでも落ち着かせようと必死だ。
「とにかく落ち着いて！」
「これが落ち着かずにいられるものか！」
彼は拳を振り回して叫ぶ。そこに誰かがやって来る気配がした。
「誰か来たわ」
アメーリアはその気配にハッとした。ガブリエレも急激に落ち着いてきた。
「お父・・・・・・いえ総督よ」

「なら好都合だ」
ガブリエレはニヤリ、と笑った。
「馬鹿な事は止めて」
アメーリアはそんな彼を窘めた。
「馬鹿な事！？何を言ってるんだ、あいつに神の裁きを与える時が来たんだよ」
彼は聞き入れようとしない。
「いいからこちらへ」
彼女はそんな彼を必死に宥める。そしてテラスの上へ隠れさせた。
そこへ入れ替わる様にシモンが入って来た。
「娘よ、そこにいたのか」
彼はアメーリアの姿を認めると微笑んだ。
（娘！？）
テラスの上にいたガブリエレはその声が聞こえた。そして驚いた。
「御父様」
アメーリアは彼を笑顔で出迎えた。
（それでは総督の消えた娘というのは）
彼に娘がいたという話はガブリエレも聞いていた。
（アメーリアのことだったのか）
彼はこの不思議な巡り合わせに驚愕した。
（何という事だ。僕の父を殺した男の娘が僕の愛しい人だったとは）
だがこれはアメーリアも同じである。またそうだとしても二人の愛の炎は衰えることはなかった。
「どうした、何やら口論していたようだが」
「いえ、何でもありませんわ」
彼女は先程のガブリエレとのやり取りを誤魔化した。

第二幕その四

「そうか。ところで以前聞いた話だが」
シモンは娘に対し尋ねた。
「はい」
「結婚を約束した相手というのは誰だ？有力な貴族の若者だとは聞いたが」
（僕の事か）
ガブリエレは上で聞きながら思った。
「御前に相応しい相手なら私も喜んでそれを認めよう。それは一体だれかね」
「はい、それは・・・・・・」
父に促され話を始めた。
「ガブリエレ。ガブリエレ＝アドルノです。アドルノ家当主の」
彼女は顔を赤らめて言った。
「そうか・・・・・・」
シモンはそれを聞いてうなだれた。
「残念だがその恋は諦めるのだな」
彼は娘を諭す様に言った。
「どうしてですか！？」
彼女はそれに対して問うた。
「これを見なさい」
シモンはそう言うと懐から一枚の書類を取り出した。
「それは・・・・・・」
そこにはシモンと敵対する有力な貴族達の中でも過激派と目される人物の名が書かれていた。
多くの名がある。アメーリアはその中に自分の愛しい人の名があるのを認めた。
「そんな・・・・・・」

アメーリアはそれを見て絶望の声をあげた。ガブリエレは密かに身構えた。
「許して下さい、彼は私の愛しい人なのです」
彼女は父に対して懇願した。
「駄目だ、それは出来ん」
シモンはそれに対して首を横に振った。
「それならば私は・・・・・・」
彼女は意を決した顔で父を見て言った。
「あの人と一緒に断頭台へ上がります」
「なっ・・・・・・！」
シモンはその言葉に絶句した。ガブリエレも声だけは何とか抑えたがその言葉に絶句した。
「それ程までにあの男を愛しているというのか！？」
「はい」
アメーリアは父の問いに対して強い声で答えた。
「私の唯一つの願いはあの人と結ばれ永遠に共に暮らすことです。それが果たせなければ私には生きている意味がありません」
「何ということだ・・・・・・」
シモンは娘の言葉に絶句した。
（これが私の運命なのか・・・・・・）
彼は心の中で呟いた。
（長きに渡って捜し求めていた娘と出会えたというのに敵に奪われてしまうとは。神よ、私には孤独しか許されてはいないのですか・・・・・）
だが気を取り直した。アメーリアへ顔を向け直す。
「・・・・・・わかった、そなたがそこまで思うというのなら許そう」
シモンは苦渋に満ちた顔で言った。
「御父様・・・・・・」
アメーリアの顔が歓喜に包まれようとする。だがシモンはもう一

言付け加えた。
「だが一つだけ条件がある」
彼は娘に対し説き聞かす声で言った。
「彼が己の非を悟り私と和解するのならばな」
「はい・・・・・・」
アメーリアはその言葉に頷いた。
「彼の父はヴェネツィアと通じ私の命を狙った。だからこそ殺されたのだ。そして今も貴族達の陰にはあの街の者達がその姿を隠している」
(それは本当かっ!?)
ガブリエレはその話に対し顔を強張らせた。
(確かに以前から金の出所が気になっていたが)
彼等には首謀者がいる。その者が資金を調達していたのだがあまりにも潤沢であった為に不思議に思っていたのだ。
「彼がそれを知り私の前に現われるなら・・・・・・。私は喜んでそなたの願いを叶えてやろう」
「有り難うございます・・・・・・」
アメーリアは父に対し頭を深々と下げた。
「それでは休むとしよう。もう遅い」
「はい」
二人はテラスから去った。ガブリエレは下を覗き誰もいなくなったのを確かめると下に降りて来た。
「とりあえずあの者はいずれ調べ上げるとして」
彼は官邸の中を見た。
「それでも我が父の仇であることには変わりないのだ。たとえ父が憎きヴェネツィアと結託していたとしても」
だが内心では迷いが生じていた。彼とてジェノヴァの人間である。ヴェネツィアが憎くない筈がなかった。そして彼等と結託する事がどれだけ恥ずべきことであるのかもわかっていた。
しかし長い間抱いていた憎しみは別である。その黒い炎はそう簡

単には消えはしなかった。
官邸の中に入る。そして隠れながらその中を慎重に探る。
奥の部屋に彼はいた。テーブルの上に置いてある茶碗に壺の中の水を注ぎ込み飲んでいる。質素な生活を好む彼は茶を嗜まない。いつも水を飲んでいるのだ。
「ふう・・・・・・」
彼は水を飲み終えると溜息をついた。
「水でさえ苦いものに思える」
彼は椅子に座り呟いた。
「これが街を治める者の苦しみか。泉の水でさえ毒のようだ」
彼は疲れ切っていた。その全身を鈍い疲労が襲う。
「そして全て私のもとを去って行く。恋人も娘も。そして私はいつも孤独だ」
総督になってから今までの事が走馬灯の様に思い出される。しかしどれも寂しく苦しいものばかりだった。

第二幕その五

「娘よ、行くがいい。そして・・・・・・笑顔で私を見てくれ」
そう言うとまどろみだした。そして椅子に座ったまま眠りに入った。
ガブリエレは彼が眠ったのを見届けるとゆっくりと部屋の中に入った。そして彼を見た。
「完全に眠っているな」
彼はシモンを見下ろして言った。シモンは顔を俯け倒れ込む様な姿勢で眠っている。
「今この長年の恨みを晴らす時」
懐から短刀を取り出した。鞘から抜く。刀身は黒く光っている。
「父上、見ていて下さい」
身構える。そして一気に振り下ろそうとする。
だが身体が動かない。急に竦んでしまった。
「どういうことだ・・・・・・」
ガブリエレは構えを解いた。そして短刀を握る右手を見て呟いた。その右手は震えていた。
「つい先程まで憎しみに燃え上がっていたというのに。一体何故・・・・・」
彼はいぶかしんだ。だが気を取り直し再び身構えた。
その時アメーリアが部屋に入って来た。
「ガブリエレ・・・・・・・！」
彼女は彼を迎えに行くところだったのだ。その近道であったこの部屋を丁度通り掛かったのだ。
「アメーリア・・・・・・」
彼は短刀を振り上げたままの姿勢で彼女に顔を向けた。バツが悪そうに見る。
「止めて！」

彼女は彼の身体を抱き止めて言った。
「しかしこの男は僕の・・・・・・」
彼はそれでも短刀を離そうとしない。だがそれを握る力が序々に弱まっていくのを感じていた。
「テラスで聞いたでしょう、だから・・・・・・」
アメーリアはそんな彼を必死に止める。
「だが・・・・・・」
ガブリエレはそれでも短刀を握っている。だが構えを解いた。
騒ぎにシモンが目覚めた。アメーリアとガブリエレを見る。
「そうか・・・・・・」
ガブリエレの手にある短刀を見て呟いた。
「刺すなら刺すがいい。私は逃げも隠れもしない」
彼は椅子に座ったまま毅然として言った。
「言われなくとも」
彼は再びその手を振り上げようとする。だが出来ない。
「クッ・・・・・・」
呻く様に言った。何とか振り上げようとするがどうしても出来なかった。
「アメーリア、君に従おう」
彼は短刀を床に放り捨てた。短刀は音を立てて床に転がった。
「そうか。捨てたか」
シモンはその短刀を見下ろしながら言った。
「だが一つ聞きたい。どうやって牢屋から出て来た」
「・・・・・・おわかりになると思いますが」
ガブリエレは顔を顰めて言った。
「私がか!?」
「はい。アメーリアがさらわれた一連の経緯をよくお考えになられれば」
「それよりもそなた自身に聞いた方が早いがな」
彼は暗に拷問を示唆した。

「お好きなように。ですが僕はこれ以上は決して言いませんよ」
「だろうな。ならば良い。私にも事情は大体察しがつく」
シモンは短刀を見下ろしながら言った。
「今度はあの連中が断頭台へ行くか。因果なものだな」
そう呟くとガブリエレへ顔を戻した。
「私が憎いか」
彼はガブリエレに問うた。
「ええ、勿論です」
ガブリエレは迷う事無く答えた。
「そうか。だろうな」
シモンは目を閉じて言った。
「では私は御前に復讐を遂げさせてやろう。アメーリア」
そう言うと娘を呼んだ。
「はい」
アメーリアは父の側に来た。

第二幕その六

「今からそなたはここにいるガブリエレ＝アドルノの妻だ」
シモンは娘に対して言った。
「えっ、それは・・・・・・」
その言葉にアメーリアもガブリエレも驚いた。
「復讐を遂げたいのだろう。ならば私は自分の最も大切なものをそなたに与えよう。私がそなたのかけがえのない者を処刑場に送った代わりにな」
「御父様・・・・・・」
アメーリアは父の名を呼んだ。
「本来ジェノヴァはこうすべきだったのだ。貴族だ、平民だと争わずに同じ街に住む者としてな」
彼は顔を俯けて言った。
「私もそれはわかっていた筈だったのだ。あの時に」
ふと二十五年前のことが脳裏に浮かぶ。アメーリアの母マリアとの愛が。
「だが私はそれを長い間忘れていた。愚かにもな。そんな男がどうしてこの街を平和に導けようか」
彼は嘆息して言葉を出した。
「憎悪・・・・・・。それが全ての災厄だった。私もそれに心を捉われていたのだ」
あのフィエスコとのいがみ合いを思い出す。無益な、それでいてかけがいのないものを失った憎悪だった。
（あの男も最後にはそれに気付いただろうか）
ふと彼のことを思う。あれ程憎み対立したというのに。
（だがそれももうどうでもいいことだ）
彼は内心そう呟いた。
（これで今までの愚かないがみ合いの幕が降りるというのなら）

シモンは二人を見て思った。貴族の息子と平民の娘、その二人が今時分の前で愛し合っている。
（フィエスコ、そなたはこの光景を見て何と言うだろうな）
その時だった。不意に広場の方から不意に騒ぎがした。
「諸君、武器をとれ！」
パオロの声であった。
「貴族の奴等が総督のお命を狙っている、それを阻むのだ！」
ピエトロの声もする。どうやらまた煽動しているらしい。
「あの者達は何を考えているのだ！？」
シモンは立ち上がり首を傾げた。
「この街を逃げる前に一騒ぎ起こそうとしているみたいですね」
ガブリエレは顔を顰めて言った。
「逃げる！？何故だ！？」
「貴方を暗殺して身を隠す為ですよ」
彼はシモンに顔を向けて言った。
「私をか！？あの二人が」
シモンはその言葉に眉を顰めた。
「一体どういう事だ・・・・・・、いや」
シモンはふと気が付いた。
「成程、そういうことか」
アメーリアの誘拐の件の黒幕が誰であるか今わかったのだ。
「そしてそれが露呈するのを怖れてか。相変わらず悪知恵の働く奴だ」
彼は怒りを露わにして言った。
「おそらく自分達は騒ぎに紛れて逃げるつもりなのでしょう。どうなさいますか？」
「決まっている、捕らえて首を刎ねてやる」
シモンは声のする方を睨んで言った。
「ガブリエレ＝アドルノ」
彼はガブリエレに顔を向けて言った。

「ハッ」
ガブリエレはその言葉に畏まった。
「そなたは平民の議員及び要人達と共にあの二人に煽動されている民衆を説得せよ。彼等には罪は無い」
「わかりました。そしてあの二人はどうしますか？」
彼は問うた。
「心配は無い。どうせこの街からは逃げられはせぬ」
シモンは毅然として言った。
「馬鹿者共が。すぐに逃げればよいものを」
彼は怒りを込めた声で呟いた。
「所詮は煽動だけが脳の連中か。何時までもそれが通用すると思ってか」
彼は退室するガブリエレを見送りながら言った。
「煽動は政治とは違う。それがわからぬ愚か者は最後には斧の下で死ぬ」
やがて騒ぎは収まった。そしてシモンを称える声が聞こえてきた。
「終わったか」
シモンはそれを聞きながら呟いた。
「アメーリア、いやマリアよ」
彼は娘へ顔を向けた。
「はい」
「そなたの目は曇ってはいないようだな」
シモンは娘に対して言った。やがてパオロとピエトロが捕らえられたとの報告が入って来た。

第三幕その一

第三幕　官邸の中にて

騒ぎは収まった。ガブリエレの説得により激昂した民衆は落ち着きを取り戻した。

パオロとピエトロは捕らえられ誘拐及び煽動の罪で死刑を言い渡された。

ガブリエレはアメーリアと結婚する事が発表された。この時同時に彼女がシモンの娘であることも公表された。

ここは官邸の正面の近くにある格間である。そこからジェノヴァの市内が見える。

港町が今ガブリエレとマリアの婚儀を祝って光で覆われている。そこに誰かがやって来た。

見ればフィエスコである。士官の一人と一緒である。

「外が騒がしいな」

フィエスコはふと言った。

「ああ、ガブリエレ殿とアメーリア様のご結婚が決まったのだ」

士官は言った。彼はここでアメーリアと言った。その為フィエスコは気付かなかったのだ。

「そうか。牢屋から出てすぐか」

「ああ。騒ぎの鎮圧に功があってな」

「ふむ。昨日の夜の騒ぎはそれであったか」

彼は頷いて言った。

「そうだ。爺さんも察しがいいな」

士官は笑って言った。

「伊達に今まで生き長らえているわけではない」

フィエスコは笑いながら言った。

「ははは、それは少し冗談が過ぎるぞ」

士官はそれを聞いて笑った。

「ほほほ、そうかな」
彼はそれに対し悪戯っぽく笑った。だが本心は違っていた。
(生き恥をさらしているわけではな)
彼は心の中で自嘲して言った。
「まあいいさ。これは返すとしよう」
士官はフィエスコに剣を差し出した。
「あんたは自由だ」
「そうか」
フィエスコはその剣を受け取った。そして内心思った。
(惨めな自由だ)
彼にとってそれはシモンから与えられた自由であった。
(よりによってあの男からとはな)
そこへ誰かが引き立てられて来た。
「おや、あの男は」
フィエスコはその男達の姿を見て言った。
「ああ、あの二人か」
士官はその声に答えた。
「今回の煽動の罪でな。死刑になったんだ」
「そうか。自業自得だな」
フィエスコは二人を見ながら言った。
(思えばあの時もこの連中は民衆を煽動したな)
彼はふと思った。
(そして今こうして斧で首を落とされるか。愚か者に相応しい結末だな)
それは奇しくもシモンと同じ考えであった。
「ええい、離せ」
パオロとピエトロは両腕を押さえる兵士達に対して言った。
「今更何処へも逃げはしない。大人しく断頭台へ出向いてやる」
二人は吐き捨てる様に言った。
「やれやれ、最後までふてぶてしいな」

士官はそんな二人を見て言った。
「俺はこう見えても一応貴族でね。あの連中には色々と煮え湯を飲まされているんだ」
「そうか」
「ああ。おかげで顔も見たくないよ。これで失敬させてもらうぜ」
「うむ。ではな」
「ああ。しかしあんたも態度がでかいな」
「それだけは余計だ」
「じゃあな」
士官はその場を去った。フィエスコは二人と擦れ違った。
「おや、あんたは」
先にパオロの方から声をかけてきた。
「何だ」
それは予想していた。フィエスコはそちらに振り向いた。
「出て来たのか。だが俺達はこうして刑場行きだ」
ピエトロは皮肉をまじえて言った。
「自業自得であろう」
フィエスコはそんな彼に対しても言った。
「フン、相変わらずだな」
パオロはそんな彼を口の端を歪めて笑った。
「まあいいさ。どうせボッカネグラの奴もすぐに俺の後にやって来るさ」
「それはどういう意味だ」
フィエスコは周辺の兵士達へ顔を向けた。
「少しこの場を離れてくれ」
「しかし・・・・・・」
兵士達はその言葉に困惑した。
「心配無用。その間この二人はわしが責任をもって見張っておく。この剣に誓ってな」
そう言うと剣を掲げてみせた。

「そう言われるなら」
兵士達はそれに納得した。同時に宝石も掴まされた。
「ほんの少しの間でいいからな」
フィエスコは彼等に対して言った。兵士達はその場を後にした。
「さて、今の言葉だが」
フィエスコは兵士達がいなくなったのを見届けると二人に対して問うた。

第三幕その二

「それはわしがあの男を倒すという意味であろうな」
彼は顔を強張らせて問うた。
「そうではないと言ったら？」
パオロは悪びれず言った。
「つくづく見下げ果てた男だな」
フィエスコは侮蔑した声で言った。
「フン、何とでも言え」
パオロは口の端を歪めて言った。
「どのみち俺達は死ぬんだからな」
ピエトロもそれに同調した。
「所詮はその程度の連中ということか」
フィエスコは二人を再び侮蔑する言葉を出した。
「どうやら貴様等は貴族だ、平民だという以前に人間として卑しい者達であったようだな。所詮愚か者達を煽動するしか芸のない連中だ」
「だがシモンの奴を地獄に落とす事だけは出来たぞ」
パオロのその言葉には卑しさを恥じる様子は微塵もなかった。
「では聞こう。それはどうして行なったのだ？」
「毒さ」
パオロは傲然と胸を張って言った。
「そうか。最後まで汚い奴だな」
フィエスコは二人を見下して言った。
「それがどうした。それによりあいつは俺達より先に地獄へ行くぜ」
「そうだな。奴の後ろ姿を見ながら嘲笑うとするか」
二人は胸の悪くなる笑顔で言い合った。
「勝手に言っているがいい。そして地獄で永遠の裁きを受けるのだな」

フィエスコにとって彼等は敵ではなかった。ただ卑しむべき輩でしかなかった。
「シモンも愚かだな。このような連中を腹心にしていたとは」
「何とでも言え、俺達が奴を総督にしてやったんだからな」
「少なくとも貴様等程度の連中に総督にしてもらったような小さな男ではないがな」
彼はこれ以上二人と話すつもりはなかった。丁度その時兵士達が戻って来た。
「さっさと行くがいい。お迎えが来たぞ」
兵士達は二人を取り囲んだ。その時遠くから歓喜の声が聞こえて来た。
「ガブリエレ＝アドルノ万歳！彼の婚儀を祝おうではないか！」
ガブリエレの幸福を祝福する声であった。それを聞いたパオロの顔色が一変した。
「糞っ、忌々しい」
彼は吐き捨てる様に言った。
「あの娘は俺が手にする筈だったのに」
「それは残念だったな。所詮貴様には過ぎたものだ」
フィエスコは彼に対し冷たく言った。
「過ぎたもの！？一度は俺がかっさらったものがか」
彼は醜い笑顔を浮かべて言った。その言葉を聞いたフィエスコの顔色も一変した。
「あの犯人は貴様だったか！」
彼は血相を変え剣を抜いた。
「そこになおれ！このわしの手で成敗してくれる！」
彼は二人を斬り捨てようとする。だが二人はそんな彼を前にしても悪びれることなく言った。
「好きにしろ。どうせ俺達は死刑だ」
そう言って旨を突き出した。
「くっ・・・・・・・」

そのふてぶてしい様子にフィエスコはためらった。その間に兵士達が彼を宥める。
「・・・・・・わかった」
兵士達に宥められフィエスコも落ち着きを取り戻した。彼は剣を収めた。
「貴様等の様な下賤な者を斬っても剣の穢れだ。断頭台の斧こそが貴様等に相応しい」
そう言うと彼等から顔を逸らした。
「行け。そして悪行の報いを受けるのだな」
二人は兵士達に連れられて行った。そしてフィエスコの前から消えた。
「これであの連中を見るのも最後だな」
彼は冷たい視線で彼等の背を見ながら言った。
「さて、とあの様な連中はもうどうでもよい」
彼は官邸の執務室の方へ顔を向けた。
「あの男が死ぬというのか」
彼は感慨深げに呟いた。
「この様な最後を望んではいなかったが」
苦しい声で言った。
「貴様はこのわしの手で死ぬべき運命なのだ。それこそ貴様がわしに与えた屈辱と破廉恥な罪の報いなのだ」
彼はあの二十五年前の事を思い出していた。

第三幕その三

「貴様はわしから娘と孫を奪った。そしてわしは貴様の命を奪う。それこそが神が定めたもうた宿命なのだ」
剣の柄に手を置く。そして執務室へ向かおうとする。
「ムッ！？」
その時だった。前から数人やって来た。
「あれは・・・・・・」
見ればシモンとその従卒達であった。シモンの足取りは今にも崩れ落ちそうだ。
「あ奴か」
フィエスコは彼の姿を認めて呟いた。
「ここは様子を見るか」
彼は身を物陰に隠した。
「灯りを消すように伝えよ。そして静かにするようにな」
シモンは側に控える秘書官に対して言った。
「ハッ」
秘書官はそれに対して一礼した。
「特別な日ではない。ごく普通の二人の祝儀だ。街全体で祝う必要は無い」
「わかりました」
「そして暫く一人にさせてくれ。どうも気分が晴れぬ」
彼は周りの者達に対して言った。
「わかりました」
彼等はそれに従った。シモンから離れその場を後にする。
「ふう・・・・・・」
彼はそこにあった椅子に腰を下ろした。
「身体が重いな」
彼は顔を下に向けて言った。

「意識が乱れる。これは一体どうしたことか」
彼は疲れた声で呟いた。
「あの潮風が懐かしい。船の上で戦いを前に頬を伝わったあの風が」
かっての若き日に思いを馳せた。
「あの時こそ私の人生の中で最も素晴らしい時だった。あの時は海に生き海に死ぬものと思っていたが」
あの船の上での戦いの日々。ヴェネツィアやイスラム教徒達と激しく刃を交えたあの若かりし頃。
「あの場所で死にたいものだ。せめて最後位は」
「それは出来ないな」
フィエスコは姿を現わして言った。
「そなたはあの時の・・・・・・」
シモンは彼のことを覚えていた。
「そうだ。貴様を恐れぬ生き恥を晒す老人だ」
彼は剣の柄に手を当てて言った。
「そうか、ならば」
シモンも剣に手をかける。だがその手は剣の柄から滑り落ちた。
「な・・・・・・」
シモンはその滑り落ちた自分の手を見て驚愕した。上げようとする。だが力が入らないのだ。
「無駄だ。御前の命はもうすぐ尽きようとしている」
彼は口だけで笑った。否、笑ったつもりであった。それは笑みにはならなかったのだ。
「貴様はあのパオロ達に毒を盛られたのだ。あと幾許もなくしてこの世を去るだろう」
「そうか、あの時の水に・・・・・・」
彼は先程飲んだ水のことを思い出した。
「苦い筈だった。あれは死への水だったか」
「安心しろ、貴様は世間では勝利者としてこの世を去るのだ」
フィエスコはそう言うと剣をゆっくりと抜いた。

「だがわしとの因縁では貴様は敗者として死ぬ」
「御前はまさか・・・・・・」
シモンはこの時全てを悟った。
「そうだシモン、死人が今墓場から抜け出してきたのだ」
彼は剣を抜いた。そしてシモンにそれを向けた。
「長きに渡る我が憎しみ、今こそ受けるがいい」
だがそれを聞いたシモンの顔は急に苦しみから解放されていった。
「そうか。ようやくあの時の因果が断ち切られるのか」
「？確かにそうだが」
フィエスコは彼の顔を見て不思議に感じた。
「だがそれは貴様の死によってだ。このわしの手でな」
「そうだ。貴様の手でだ」
シモンも言った。
「御前は一人の天使を導く為に墓場から甦ったのだから」
「天使！？先程から何を言っているのだ」
フィエスコは彼のその言葉に眉を顰めた。
「どのみち貴様は死ぬのだ。取り乱さずに死ぬがいい」
「私は取り乱してはいないぞ」
彼は毅然として言った。
「かって御前は許してくれたのだが・・・・・・」
「わしがか」
「そうだ」
シモンは力無く微笑んで言った。
「御前に譲ったあの娘だ。私があの時何処かへ消え去ったと言った娘が戻って来たのだ。アメーリア＝グリマルディとしてな」
「まさか・・・・・・」
フィエスコはそれを聞いて顔を強張らせた。
「そうだ。御前がマリアとして育てていたあの娘だ」
「何だと！何故今になって真実が明らかになったのだ！」
フィエスコは絶叫した。そして剣を打ち棄てた。

「どうしたのだ？何故剣を棄てる」
シモンは彼に対して問うた。
「御前は剣をあれ程誇りとしていたではないか」
「・・・・・・わしの様な愚かな男は剣を持つに値しない」
彼はそう言うとシモンから顔を背けた。
「・・・・・・泣いているな。御前が泣くのを見るとはな」
「・・・・・・言うな、その訳は御前が天に代わってわしの心に語っている。わしは今まで取り返しのつかない事をしてきた」
フィエスコは言った。シモンを見る事は出来なかった。

第三幕その四

「それがどうしたというのだ。私と御前は今こうして和解するのだ」
「・・・・・・最後になってか。何故今まで気が付かなかったのだ、わしは」
うなだれる。罪の意識が彼の心を激しく撃つ。
「それが運命というものだ」
「・・・・・・何という残酷なものだ。どの様な責め苦よりも惨たらしい」
「・・・・・・それは違う」
シモンは嘆くフィエスコに対して言った。
「どう違うというのだ」
フィエスコはシモンに対して言った。
「あれを見よ」
シモンは指差した。そこにはあの娘がいた。
こちらに近付いて来る。その後ろからガブリエレやジェノヴァの人々がやって来る。
「マリアか・・・・・・」
フィエスコは彼女の姿を見て呟いた。
「そうだ、御前の宝だ。私が授けるな」
アメーリアがやって来た。白い祝福された服を着ている。
「御父様、こちらにいらしたのですか」
「ああ、実は御前に紹介したい人がいる」
シモンは娘に対して優しく微笑んで言った。
「あの人か」
ガブリエレはフィエスコを見て呟いた。
「ようやく本当に巡り会えたのだな」
彼はそれを見て再び呟いた。だがそれをアメーリアには言おうとはしなかった。

「おじ様、どうしてこちらに？」
彼女は自分の養育係を認めて言った。
「それは・・・・・・」
フィエスコは口籠もりながら言おうとする。だがシモンが先に言った。
「マリア、この人はもう一人のマリアの父なのだ。かって私が愛したもう一人のマリアのな」
シモンは優しい声で言った。
「ではこの人は私の・・・・・・」
アメーリアは彼の顔を見てハッとした。
「そうだ。彼もまた気の遠くなる程長い間御前を捜し愛していたのだ」
「そして今やっと巡り会えたのね」
アメーリアは恍惚とした顔で言った。
「そうだ、これで長い間我々を支配してきた憎しみは消え去る」
シモンは一同に顔を向けて言った。
「これで私の役目は終わった」
「いえ、御父様にはまだやるべき事が残っています」
アメーリアはそれに対して言った。
「いや、私の為すべきことは全て為した」
彼は娘に対して言った。
「私はもうすぐこの世を去る」
「そんな、その様なご冗談を・・・・・・」
アメーリアはそれを信じようとしない。
「いや、真だ」
フィエスコが言った。
「彼は先程毒を飲んだしまった。パオロが水に入れた毒をな」
「パオロが・・・・・・」
ガブリエレはその言葉を聞いて考えを巡らせた。
「ではあの時の・・・・・・」

ガブリエレがシモンに忍び寄った時にテーブルの上にあったあの壺の中の水であった。
「そうだ」
シモンは彼に対し答えた。
「それに気付かなかったのも運命だったのだ」
彼はそう言うとゆっくりと倒れた。
「御父様！」
アメーリアは父を必死に助け起こした。
「無駄だ、私はもうすぐこの世を去る」
彼は娘の腕の中で言った。
「だが悔いはない。こうして娘に出会えたのだからな」
彼は微笑んで言った。
「そんな、やっとお会い出来たというのに・・・・・・」
彼女は涙を流していた。ガブリエレもフィエスコもそうであった。
「私の生涯は憎悪と血に彩られていた。だがそなた達は違う」
シモンはアメーリアとガブリエレに対して言った。
「そなた達には神のご加護があるだろう。そしてジェノヴァもまた真の意味での繁栄を迎える」
彼の声は穏やかであった。それはまるでこれまでの長い憎しみの歴史であったジェノヴァの歴史を清めるかの様であった。
「私はそれをあの世で見よう。それこそが私の最後の仕事だ」
「この世の幸福は全て束の間の悦楽に過ぎないのか」
フィエスコは彼の言葉を聞いて呟いた。
「御父様、死なないで！」
アメーリアが必死に声をかける。
「これが今までの憎悪の報いだというのか」
ガブリエレはかって憎しみに捉われていた己が心の愚かさを悔やんだ。フィエスコは二人を見て再び呟いた。
「人の心は涙を流し続けるものだ。それが絶える事は決してない」
シモンは最後の力を振絞ってアメーリアに対して言った。

「最後に顔を見せてくれ」
「はい」
彼女はその顔を父へ近付けた。
「これでもう良い。思い残す事は何一つとしてにない」
そしてジェノヴァの人々に顔を向けた。
「これでお別れだ。だが一つだけ伝えよう」
「はい」
皆その前に畏まった。
「次の総督はガブリエレ＝アドルノを推挙したい。皆この者と共に繁栄の道を歩んでくれ」
そして次にフィエスコへ顔を向けた。
「娘達とジェノヴァを頼む」
「・・・・・・・・・・」
彼は黙って頷いた。そしてシモンはアメーリアに顔を向けた。
「さらばだ」
そう言うと静かに目を閉じた。そしてゆっくりとその頭を後ろへ落とした。
「御父様！」
だがむ返事は無かった。彼は娘の腕の中から天界へ旅立ってしまった。
「ジェノヴァの市民達よ」
フィエスコはジェノヴァの人々へ顔を向けて言った。
「これからは彼を、がガブリエレ＝アドルノを総督と認めてくれ。そして彼と共に歩もう」
「いや・・・・・・」
誰かがふと口に漏らした。
「ボッカネグラだ！」
そして言った。
「そうだ、ボッカネグラだ！」
皆口々に叫んだ。

「・・・・・・だが彼はもういない」
フィエスコは彼等に対して言った。
「今我々が彼に出来る只一つの事は」
そう言ってアメーリアの腕の中で眠るシモンに顔を向けた。
「祈るだけだ」
皆その言葉に従った。跪き静かに祈りを捧げる。
「そしてこの街を覆った憎しみよ消え去れ。忌まわしい対立の炎は永遠に灯ってはならぬ」
フィエスコは静かに言った。その時遠くから何かが聞こえてきた。
「鐘か」
それは教会の鐘の音であった。
「神の声は全てを清めて下さる。人間の愚かな過ちも。しかし」
彼はもう一度シモンの顔を見た。
「罪の意識は最後の審判まで清められることはない」
鐘の音は静かに鳴り続ける。そしてジェノヴァの街を清め続けていた。

シモン＝ボッカネグラ　　完

２００４・２・２４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3260f/

シモン＝ボッカネグラ

2011年4月28日00時36分発行